

青藍会会報

第106号

令和7年12月



徳島大学医学部医学科同窓会

徳島大学大学院医歯薬学研究部
麻酔・疼痛治療医学分野

教授
田
中
克
哉



沖縄の海

撮影 宇山祐子 (医学部16期)

2025年度 青藍会賞募集

青藍会では学術研究の発展と奨励のために
青藍会賞を設けています。

若手研究者の応募をお待ちしています!!



応募締切 2026年1月13日(火)

詳細は29ページをご覧ください

卷 頭 言

青藍会とともに医療への取り組み

香川県支部長

小笠原 邦夫 (医学部16期)

令和6年に青藍会香川支部での承認を得て、藤井雅義先生の後に香川県支部長を務めることになりました。香川県支部は、徳島県に隣接しており、現在450名余りの会員が在籍しています。毎年、懇親会、講演会を兼ねて、定期的に総会を行い、親睦を深めるとともに、学術の向上をはかり、地域医療への貢献を願っています。

私は、昭和45年に徳島大学を卒業し、徳島大学の第一外科に入局いたしました。その頃の第一外科は、田北周平教授を中心とした消化器外科と、西島早見助教授を中心とした心臓外科が取り組まれていました。その頃、他の教室では、麻酔科、整形外科の充実もあり、次第に医療の分化が行われていました。2年間の大学での研修の後、徳島大学及び、四国4県で、諸先輩の御指導を受けながら、徳島大学出身の医師として育てていただきました。昭和53年になって、故郷香川県の高松市民病院（現在の高松市立みんなの病院）に赴任することになりましたが、この時期の高松市民病院は、徳島大学でお世話になった西島早見先生が、病院長として御活躍しておられました。医療については、大学病院同様にきびしく指導を受けました。また、脳外科も外科と同じ科として診療していましたが、後に独立していきました。平成18年頃から高松市民病院の老朽化に伴う移転の話があり、病院再建案が検討され、新病院の設計などの検討にも、参加することができた事は懐かしい思い出となりました。開院までには、障害（移転先の発掘調査など）もあり、ようやく平成30年9月1日に高松市立みんなの病院として、新病院が開院いたしました。この事が、令和2年2月からの新型コロナ（COVID19）感染症の発症時には中心的拠点になることができ、地域医療に貢献ができました。このことも、多くの青藍会会員の皆様に、ご支援いただいたおかげだと感じています。今後、香川県に赴任される先生方には、生まれ変わった地域医療と研修の場の提供ができる事をうれしく思います。外科の領域では、平成2年頃から、患者様の身体への負担が少ない利点があり、腹腔鏡下手術の研修が始まっており、平成3年11月には、学生時代には、教わっていなかった腹腔鏡下胆嚢摘出術の1例目を関連病院の先生方のご協力を得て行うことができました。その後は胸腔鏡下手術などにも取り組んでまいりました。今回、令和7年度の香川県青藍会支部総会特別講演で、徳島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の北村嘉章教授の最先端の治療と展望についてのご講演をお聞きすることができました。内視鏡下治療の最先端の知識と豊富な技術、治験の話を聞き、私達が目指していた内視鏡下手術の到達点に近い、理想的医療の講演を拝聴することができました。今後、多くの分野での青藍会会員の活躍を期待し、香川青藍会の中にも新風を吹き込んでいただく事を願っています。

目 次

○題 字	田 中 克哉
○写 真	宇 山 祐子
○2025年度青藍会賞募集	
○巻 頭 言	小笠原 邦夫
○青藍会会长就任挨拶	大 串 文 隆 1
○青藍会会长退任挨拶	荒 瀬 誠 治 2
○令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）	4
青藍会会长挨拶	荒 瀬 誠 治 4
医学部長挨拶	橋 本 一郎 5
議事要録	6
支部報告	7
青藍会会則	11
事業報告	13
会計報告	16
学術講演抄録	大 藤 純 20 岩 佐 武 23
2024年度青藍会賞選考過程について	久 保 宜 明 25
2024年度青藍会賞受賞講演	三 橋 慄 志 25
○2025年度青藍会賞募集	29
○第42回青藍会・医学科講演会を開催	新 佳 奈 30 坂 本 真璃紗 30
○青藍会の助成活動	
徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告	大 藤 純 32
○支部だより	
北海道支部	石 丸 裕 晃 33
東京支部	島 津 太 一 33
香川支部	居 村 曜 34
高知支部	中 村 章一郎 35
徳島大学支部	赤 池 雅 史 36
○特別寄稿	
介護老人保健施設でミャンマー人介護職員と介護ロボットと一緒に働いています	久 保 真 一 38
○会員通信	
ドタバタ	渡 辺 閔 武 40
静けさや音を活かしてデザイン楽し	板 東 浩 41
「青藍の誉れ」のゆりかごを歩く	本 田 壮 一 42
50周年記念同窓会「ごじゅうまる会」と同記念誌	足 立 克 仁 43
卒後42年目の同窓会の報告（第21回医学部29期同窓会）	板 東 康 晴 44
医学部第33期卒業生の同窓会開催報告	中 野 俊 次 45
俳 句 小 谷 雄 二・零 俊 一・駒 木 幹 正・真 鍋 正 広 48	
○書籍紹介	
「思春期・青年期悩みの特効薬」	谷 憲 治 49
○徳島大学の動き	
「青藍講堂」改修および医学部「コモンエリア」の整備について	西 岡 安 彦 50
一 医・歯・薬がつながる共創の拠点	赤 池 雅 史 51
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介	河 野 豊 53
ウイメンズヘルス支援学分野 加 地 剛 54	

徳島大学キャンパスライフ健康支援センター新任教授紹介

アクセシビリティ支援部門 梅原英裕……55

○留 学 記

タイ・ランバーン病院にて	飯田倭久	56
サマーセミナー2025:モンゴルの熱気に触れた4日間	石田祐也	57
2ヶ月間の留学が教えてくれた学びと感謝	得津成次郎	58

○第77回西日本医科学生総合体育大会の結果

第77回西日本医科学生総合体育大会を終えて	剣道部 橋本青空	59
	ゴルフ部 吉田怜央	60
	陸上競技部 佐藤聖	61
	水上競技部 吉田恵	62

○学 生 だ よ り

折り返しに向けて	安倍隆之介	63
これまでの大学生活を通じて	加藤碧	63
活気と個性あふれる医軟テ!!	吉川和輝	64
「踊る阿呆たち～医学部たけのこ連～」	平良ひなり	65
崖っぷちだった蔵本祭	富江龍太郎	66

○青藍会の動き

教授就任挨拶	東京女子医科大学腫瘍内科 近藤俊輔	67
	四国大学生活科学部健康栄養学科臨床薬理学 石澤有紀	68
高知大学医療学系(医学部)内分泌代謝・腎臓内科学	岸誠司	69
病院長就任挨拶	高知赤十字病院 溝渕樹	70
	徳島県立海部病院 影治照喜	70
青藍会人事(評議員名簿・支部長名簿・役員名簿・委員会名簿)		71
○青藍会事務局事務長就任退任挨拶	米崎正則	76
	小西竹生	76
会員の異動		77
物故者		78
青藍会会費納入状況		79
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い		80
事務局からのお願い		81
○投稿規定		82
○編集後記	沼田周助	

★支部総会開催のお知らせ

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください。

北海道支部総会 令和8年1月10日(土)

連絡先: seirankai.hokkaidosibu@gmail.com

岡山支部総会 令和8年2月7日(土)

連絡先: hirosukeendol@yahoo.co.jp

東京支部総会 令和8年3月14日(土)

連絡先: nokihara.h@jihs.go.jp

最新の情報につきましては青藍会ホームページをご覧ください。→



青藍会会長就任挨拶

青藍会会長就任あいさつ



私はこの度、荒瀬会長の後任として青藍会会長に就任いたしました大串文隆（昭和53年卒：24期）と申します。徳島出身で、卒業後螺良英郎教授の旧第三内科（現呼吸器膠原病内科）に入局、大学で研修後、羽曳野病院に出向、大学に帰り生化学教室（山本尚三先生）に学内留学、米国国立衛生研究所呼吸器部門（Dr Crystal）に留学、帰国後徳島大学で臨床・研究・教育に従事しました。国立高知病院と東高知病院が統廃合された新国立高知病院に平成12年に就職し、退職後徳島に帰り博愛記念病院に勤務しております。

大学と一般病院の両方に勤務経験があることで青藍会から声がかかり荒瀬先生のもとで副会長として活動してきました。青藍会がどうあるべきか自問しておりましたが、現時点では答えはでていないのが現状です。学生時代は医学部ワンダーフォーゲル部に所属しており、第三内科の入局理由もクラブの先輩が多いこと、顧問が螺良先生であったことでした。螺良先生には様々な施設で学ばせていただきました。これらの施設で交流を持った他大学の卒業生が、自分の大学にプライドを持っていることを強く感じ、この時から母校に対する意識が高まりました。母校が自慢でき誇らしくなるようなところであってほしいと思います。母校の成果や発展は学生を含む会員全員の心の充実やプライド強化につながります。

大串文隆（医学部24期）

青藍会設立の趣旨は「会員相互の親睦・懇親・情報交換を厚くし、学術の向上をはかり、母校の発展に尽くす」です。『母校』という言葉には、現在その学び舎で研鑽を積む在校生も当然含まれます。若者の中で徳島という場所の魅力が失われ徳島に残る卒業生が少なくなったといわれています。青藍会は徳島大学医学部の魅力を増すための協力・支援・援助を通じて母校の変革・発展に寄与したいと思っております。その結果卒業生が多く徳島に残るようになることを期待しております。数年前より学生も正会員となり、彼らへの支持と支援により将来の母校愛にあふれた会員を増やすことも重要な課題と考え、引き続き医学生の支援も充実させていきたいと思っています。また、全国で活躍している青藍会会員の優れた業績や成果を広報することも大切な役目と考えます。卒業して時間がたつと所在が不明な会員がみられることがあります、青藍会は全ての卒業生の現在地を把握する組織でありたいと思っています。青藍会は多くの課題を抱えていますが、一つひとつ真摯に取り組み着実に克服していきたいと思っています。恩師から教えられた「天命を待って人事を尽くす」という言葉を私は大切にしています。会長として、できる限りの努力を惜しまず、今後も皆様と共に前進してまいりたいと思っています。青藍会をなお一層発展させ、皆様の要となる組織になるように努めていく所存ですので会員の皆様には、引き続きご助言・ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

青藍会会長退任挨拶

青藍会会長退任の挨拶



令和2年7月、会長に推挙され早くも5年が経ちました。規約では会長任期は2期4年までとなっているのに5年とは?との疑問があると存じますので、一言述べさせていただきます。会長就任時、私の役割は(1)会費を収めていただけるactiveな会員を増やすこと、(2)卒業時に、母校愛、同胞愛、特に同窓会愛を持たずに卒業生を減らし、次の青藍会会員増加につなげること、の2点に尽きると考えていました。ところが就任から3年間はずっとコロナ非常事態下で、青藍会が行わなければならぬ公的なことすらできませんでした。各種のことができはじめた2期終了を迎える頃、副会長をはじめ多くの関係者、評議員の方々より、やっと非常事態が終わり青藍会も実働できるようになつた今、あと1年だけでも会長として頑張っていただきたいとの言葉を頂き、自分にもやらなければならぬこともできなかつたとの気持ちもあり、任期中が非常事態だったことも考慮し、1年だけ続けさせて頂きました。

思うに令和2、3年の頃は、卒業生の8割強が他府県、外地に出かけ、母校と縁を切るが如くに青藍会ともおさらばするようでした。会長としてしなければならないことを考えていましたが、時はコロナ騒動で東京オリンピック延期が決まった時でした。世の中の状況が一変し、コロナ蔓延防止のため3密禁止、マスク着用がまるで憲法のようになり、あらゆる大小集会は中止、なんと入学式、卒業式もなくなりました。遠くから見ていると、学生らは誰からも祝福の言葉もなく、勝手に入学し卒業したように見え、私たちは医学科の動きの詳細を情報として知らされるだけでした。本来なら学生同士、学生・諸先生方・先輩諸氏が集まるfieldsで人と交流しながら医学生として成長するという、大学生活が送れな

荒瀬誠治(医学部20期)

くなったのです。オリンピックでさえ出来ないのにましてやクラブ活動!同好会!おや!と全てが活動停止となり、講義や試験はPC画面相手のリモートとなり、医学部での最も大切なご遺体解剖はできるのか、病気の患者さんと相対して初めて成立する臨床実習はどうなるのか、このような大学生活を送る中で後輩達は良き医療者として卒業できるのか?等々、本当に心配しました。私達old ageが少しは感じた同窓仲間やクラブ仲間を慈しむ心、恩師や先輩方への感謝の心、ひいては徳大医学部出身者の誇りや矜持、徳島での大学生活の充実感、他を得て旅立てるのか?青藍会としてはそのような中でも奮闘する学生(後の青藍会員)や医学部に残つて後輩のためにと頑張る皆さまへの応援・支援をすることが使命と考えていました。

就任当初、本会財政状態は桜井前会長の頃より皆様のご努力もあり、立ち直りを見せており、青藍会設立の趣旨に則つての各種行動ができる財政となっていました。ところが学生に青藍会の姿をきちんと伝える機会が失われました。なんとか伝えない限り青藍会の存在すら忘れられると思い、リモート講義の中へ紛れ込まつて頂き、青藍会の趣旨内容、役目他を説明し、会費納入他のお願いをしてきました。同時に、学生に対して入学お祝い、白衣・手術衣授与、青藍会奨励賞、MD-PhDコース学生への資金援助、海外留学学生支援、スポーツ奨励賞、卒業記念品贈呈、等を行つきましたが、これらの行為が学生らにどのように伝わっているか不確かでした(多分十分には伝わってなかつたと思います)。また、青藍会に何の思い入れもなく卒業し、青藍会と連絡すら取らない卒業生が増えたことに腰が砕けそうになりました。そこで、令和5年から学生を青藍会正会員とし、学生の方から青藍会活動に直接参加してもらい、青藍会を認識してもらうことにしました。度々、学生らと会を持ち、学生の要望を受け入れつつ各種支援を行い、その行為の実施・実働は学生に任せることを重ねるうちに、少しづつは青藍会を理解して

くれたと思います。一つの証拠として、卒業時の5年間会費一括納入率は30%まで落ちていましたが、昨年、今年と90%を超えるました。加えて嬉しいことは、卒業後の動向をきちんと青藍会に知らせてくれ、青藍会にactiveに参加する卒業生が増えています。少なくとも卒業生の心に青藍会意識は育っている感じています。

一方、会員の研究業績を顕彰する「青藍会賞（賞金100万円）」が研究者の栄誉・実績につながると、若手会員に認識されるようになり、応募者が増えてきました。本賞受賞者から続々と自学・他学の教授（医学部他）が誕生し、加えて受賞者の皆様がその後もactiveな青藍会会員となり、全てを次代に伝えようしてくれた事も心弾むうれしい結果でした。また、青藍会+学生主催の講演会が再開され、世界のiPS細胞研究の最前線を走る高橋淳先生、政代先生ご夫妻や、心筋細胞移植の澤芳樹先生らをお呼びすることができました。最先端の医学研究・臨床領域を駆け抜ける先生方の研究態度・姿勢を知るだけでなく、先生方が受けとってきたであろう歓喜のシャワーを、学生や会員に（将来の自分を思い描きながら）全身で疑似体験して欲しかったです。

さて、青藍会設立の趣旨である「会員相互の懇親を図る」根本をなす全国各支部の活動や各学年同窓会活動も長年コロナで中止となっていました。支部活動を活発にするために、支部会を通じて協力できることはなんでもするとの思いは、当初は何もできませんで、唯一できたことは青藍会会報を通じての必要情報を提供し共有することだけでした。青藍会会報は充実してきたと思います。その後、各支部会の再開とともに、九州、広島、岡山、兵庫、近畿、香川、愛媛、高知、東京各支部会に参列し、皆様方の御活躍ぶりを感じるとともに、ご要望もお聞き出来ました。支部会の隆盛はひとえに支部を運営する皆様の努力にかかっており、随分な負担を強いていることも実感しました。青藍会本部からできることは限られており、当日の講演者のなかだちと援助くらいで申し訳ありませんが、会長として心から感謝申し上げます。なお5年前～2年前までの卒業生には、青藍会から何もできないままに徳島を出

港（出奔？）させてしまいました。日本中に散らばった彼らには各支部会員となって欲しいのですが動向がはっきりしていません。青藍会としてあらゆる手段で動向を知り、こちらからの情報を伝えたいです。2年前からは卒業時に学生の前に直接出向き、想いのだけを祝辞にのせて述べるとともに、徳島大学のロゴ入り白衣を手渡し、心からおめでとうと送り出すことができました。アナログでしか伝わらない思いがあるのでしょう。一部の卒業生から青藍会も頑張ってください（？）、これから僕らもactiveに参加しますとの言葉をかけられました。とにかく若手会員の参加を伴う支部会を、各支部で開催していただき、良き会員生活を吹き込んでいただきたいものです。のために本部にできるお手伝いはなんでもやります。

支部の中には徳島大学支部、徳島支部がありますが、青藍会が始まって以来、支部会等は全く開催されていませんでした。設立時の経緯他から「青藍会総会を持って大学、徳島支部会にあてる」くらいの想いがあったようです。今や1,600人以上となった会員間の懇親、支援、情報提供、共有、他が少しおそろそかになっているとも感じていました。そこで、今年の6月1日に、ホテルクレメント徳島で2支部合同の会を開催しました。手弁当（学生会員は招待）の会でしたが、恩師を始め70人強の会員が集まり、個々の現状を述べ合い、談笑し、やっと徳島での懇親をはかる支部会ができたことを喜びました。特に大学支部からは多くの若手会員に参加いただき、先輩諸氏と談笑、懇親の場を持っていただき感謝申し上げます。

青藍会会長を引き継いだ時の解決案件にはある程度の答えを出せたかなと思いますが、非解決案件は次の大串会長さんに引き継がれます。何卒ご支援お願い申し上げます。5年というirregularな会長生活を支えていただいた皆様に心からお礼を申し上げます。また、7,000人強となった会員からの情報を束ねて管理するとともに、間違いない個人情報もしっかりと把握し、常に会長の厳しい要求に応えながら、大変な仕事にも全力を尽くしてくれた事務局の皆さんには心より感謝します。

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

令和7年度青藍会総会は、令和7年7月21日（海の日）10時30分よりハイブリッドにて開催いたしました。総会当日の内容をご報告申し上げます。

I 開会宣言

副会長

坂 東 智 子（医学部25期）

ただ今から令和7年度青藍会総会を開催いたします。なお、本会は評議員会及び支部長会議もかねております。開会にあたりまして荒瀬会長からご挨拶を申し上げます。

II 会長挨拶

青藍会会長

荒 濑 誠 治（医学部20期）

おはようございます。本日は酷暑の中、総会に参加いただきありがとうございます。今回も直接参加とリモート参加の総会になりました。各地の評議員、会員の皆様にはお顔をみせていただき嬉しく思います。

さて5年前の会長就任時、私の役割は（1）とにかくactive会員を増やすこと。と言えばカッコ良いですが会費を収めていただける会員を増やすこと、（2）卒業時に、母校愛、同胞愛、特に同窓会愛を持たずして卒業生を減らし、次の青藍会会員増加につなげること、の2点に尽きると考えていました。



荒瀬誠治会長挨拶



開会宣言 坂東智子副会長

た。しかし就任時は、卒業生の8割強が徳島以外に出て、母校と縁を切るが如くに青藍会ともおさらばするのでした。加えて、コロナ非常事態が宣言され、全ての活動が止められ、当時の学生らは入学式も卒業式もなく、誰からも祝福の言葉もなく、勝手に大学と離れてゆきました。本来なら学生同士、学生・諸先生方・先輩諸氏が集まるfieldsで人と交流しながら成長するという、大学生活が送れなくなつたように見受けられたのです。私たちは、そんな中でも奮闘する学生のみならず、医学部の皆さんへも応援・支援をし続けました。徳島大学医学部出身者としての誇りや、徳島で過ごした大学生活に充実感、他を持って巣立って欲しかったのです。

そのために青藍会が何をしてきたかは同窓会雑誌他で述べたので割愛しますが、一つだけ述べさせていただくと、やはり学生を青藍会の正会員としたことが最も大きな変化であったと思います。青藍会を認識してもらうために、学生の方からも青藍会活動に直接参加してもらうため、学生らとface to faceの会を持ち、要望を受け入れつつ各種支援を行い、その行為の実施・実働は彼らに任せることを重ねるうちに、少しほとんど青藍会を理解してくれたと思います。その証拠とまでは言いませんが、コロナ当初、卒業生の5年会費一括納入率は30%まで落ちていきましたが、今年は93%となりました。

さて、若手会員の研究業績を顕彰する「青藍会賞（賞金100万円）」が研究者の栄誉・実績につながると認識され、次第に応募者も増えてきました。また、受賞者から自学、他学の教授が続々と誕生したことは非常に嬉しいことでした。そして、受賞者の方々

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

はその後も active 会員として青藍会に参加してくれています。また、青藍会と学生主催の講演会も再開され、世界のiPS細胞研究の最前線を走る高橋ご夫妻や、心筋細胞移植（万博の人工心臓制作）で突出する澤先生らをお呼びすることができました。私たちは、最先端の医学研究領域を駆け抜ける先生方の態度や生き方を若者に知つてもらうだけではなく、講演者の皆様が浴びた賞賛・歓喜のシャワーを、会員に（将来の自分を思い描きつつ）全身で疑似体験して欲しかったのです。

一方、2年前（一部は3年前）から各支部活動も再開され、九州、広島、岡山、兵庫、近畿、香川、愛媛、高知、東京各支部会に参列し、皆様方の御活躍ぶりを感じるとともに要望もお聞き出来ました。支部会の隆盛は、ひとえに支部を運営する皆様の努力にかかっており、随分な負担を強いていることも実感しました。会長として心から感謝申し上げます。過去5年間コロナの中で散らばった若者らには、なんとかして各支部会に参入し活躍して欲しいものです。ところが、コロナ当初の3年間、悲しいことに青藍会も大学も彼らの動向をきちんと把握しきれていません。とにかく動向を知り、途切れつつある情報の交換・共有をきちんと行い、青藍会との関係を密にすることが急務かと思います。

最後に、全国14支部の中に徳島大学支部、徳島県支部がありますが、青藍会設立以来、支部会は全く開催されていませんでした。今や1600人以上となった会員間の懇親、会員への支援、情報提供、共有、他が少しおろそかになっているのではと感じていました。そこで、今年の6月1日に、ホテルクレメント徳島で2支部合同の会を開催しました。支部会の運営規則も基金等も何もないで、一部だけ本部の力を借りましたが、全て手弁当で行いました（学生会員は招待）。医学部創立80年の威容を見るが如く、恩師を始め70人強の会員が集まり、個々の現状を述べ合い、昔を思い出し談笑し、やっと徳島での懇親の場としての支部会が開けたことを喜びあいました。

会長の思いを述べただけの挨拶になりましたがご容赦ください。5年間、ご支援を賜り誠にありがとうございました。

III 医学部長挨拶

医学部の現状報告

徳島大学医学部長

橋 本 一 郎（医学部34期）

日頃より本学医学部の教育・研究・医療活動に格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。昨年の総会から1年間にわたり医学部医学科で動きのあった事柄についてご報告いたします。

さて、本年度は教育面で大きな前進がありました。西岡前医学部長のもとで申請しておりました徳島大学は文部科学省の「高度医療人材養成拠点形成事業（タイプB）」が採択され、「四国研究医型入試とStudent Lab から始まるシームレスな研究教育環境を活かした難病・希少疾患研究医養成拠点の形成」事業に現在取り組んでおります。これにより、1年次から3年次の医学科生21名をスチューデント・アシスタント（SA）として研究室に配置し、有給で研究補助業務に従事させることで、教育と研究の両立を推進しています。また、3年次の医学研究実習やStudent Lab 参加者が継続して研究に取り組める環境整備も進めております。

臨床実習についても、令和6年1月より新カリキュラムへ移行しました。「診療参加型臨床実習Ⅰ」では学内全科をローテーションし、「Ⅱ」では主要な診療科8科を学内外で各3～4週間かけてローテーションする形で、より実践的な臨床能力の育成に努めています。学外実習では、多くの青藍会の先生方に診療実習に対する協力をいただいております。この場を借りて感謝を申し上げます。

教員人事では、7月に血液・内分泌代謝内科学分



橋本一郎医学部長挨拶

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

野に岡山大学から松岡賢市教授が就任し、12月には新設されたメディカルAIデータサイエンス分野に、渡邊謙吾教授が就任しました。令和7年には生理学分野に吉田盛史教授が着任予定であり、生化学分野および消化器・移植外科学分野でも教授選考が進行中です。

入試制度の改革にも力を入れております。令和9年度入試からは、四国研究医型全国枠を5名増やして13名とし、学校推薦型選抜Ⅱにおいては徳島大学医学部の指定する施設での2年間の初期臨床研修を新たに課すなど、研究と地域医療の双方を担う人材育成を図っています。さらに、令和7年度入試からは徳島県医師修学資金を利用する地域特別枠を12名から17名に拡大しています。

研究体制強化においては、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に本学が四国で初めて採択されました。全国で最大55億円規模の助成を受けるこの事業では、「光工学」「慢性炎症研究」「栄養学」「情報科学」の4分野で研究拠点を整備し、「フォトニクス健康フロンティア研究院（IPHF）」を核とした先端研究の推進に取り組んでおります。なお、本院の最高収益責任者（CRO）には安友康二教授が就任しています。

また、青藍会ならびに会員の皆様からご寄付をいただいた徳島大学医学部創立80周年記念事業の一環として、令和7年4月には医学臨床A棟コモンエリアが完成予定であり、7月には寄付者芳名板を設置いたしました。青藍会館大会議室のAV設備整備計画も進んでおり、教育・研究環境のさらなる充実を図ってまいります。改めてご寄付に対して心より御礼を申し上げます。

最後になりますが、青藍会の皆さんには引き続き温かいご支援とご助力を医学部に賜りますようお願い申し上げます。



IV 議事要録

- 日 時 令和7年7月21日（月）10:30～16:00
- 場 所 ハイブリッド開催（青藍会館大会議室）
- 出席者 46名（会場36名・リモート10名）
- 議 題

（1）青藍会会員の現状報告

坂東副会長から青藍会会員の現状報告があり、黙祷が行われた。
正会員数6,708名（総会員数7,692名、物故会員数984名）教授就任6名、病院長就任2名、青藍会出身教授87名

（2）青藍会役員の改選（案）

荒瀬会長から、青藍会役員の改選案について説明があり、審議の結果、原案のとおり大串文隆先生が新たな会長として承認された。なお、副会長については、就任をお願いした先生が直前に辞退されたため、本年8月に開催予定の役員会にて新しい副会長を選出することが承認された。

（3）令和6年度青藍会事業報告（13頁）

- 令和6年度青藍会収支決算報告（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（16頁）
- 令和6年度医学部50周年記念事業募資金会計決算報告（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。

（6）令和6年度青藍会運営費収支決算報告（案） 審議の結果、原案のとおり承認された。（18頁）

（7）令和6年度監査報告（16頁・18頁）

- 令和7年度青藍会事業計画（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（15頁）
- 令和7年度青藍会収支予算（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（17頁）

（10）令和7年度青藍会運営費収支予算（案） 審議の結果、原案のとおり承認された。（19頁）

（11）名誉会員の推薦について

荒瀬会長から、平成16年に徳島大学医学部教授に就任され令和7年3月末に退任された島田光生先生について、長年、教育・研究・診療において徳島大学及び青藍会に貢献されたので、名誉会員に推薦したいとの提案説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

（12）その他

北海道から総会にご参加いただいた、長島仁先生（医学部33期）よりご挨拶があった。また、太田房雄先生（医学部13期評議員）より、総会に懇親の時間を設けていただきたい、青藍会のIT化を促進するべきとの発言があった。



総会風景

V 支部報告

東京支部

東京支部事務局長

軒 原 浩（医学部40期）

令和7年度の青藍会総会に、石井保夫支部長の代理として出席いたしました。私が研修医のころからご指導いただいた同門の大串文隆先生（24期）が、次期青藍会会長に就任されました。また、今回青藍会賞を受賞された三橋惇志先生（62期）は、かつて共に仕事をした同門でもあったことから、今回の総会は私にとって大変感慨深いものとなりました。さらに、西岡安彦前医学部長（34期）とともに昼食をとりながら学生さんから多くの意見を聞けたことも大きな収穫でした。

それでは、この1年の東京支部の活動状況について報告いたします。

I. この1年間の活動報告

東京支部では、右記のように役員会、支部総会を開催し、①東京支部会則の見直し（2025年3月8日に改定）、②役員会の運営（若手役員の登用）、③メーリングリストやLINEの活用による東京支部総会への参加促進、④青藍会ホームページ（東京支部のページ）および青藍会報の活用、について検討し、実施いたしました。



東京支部報告（軒原浩事務局長）

青藍会東京支部の活動 (2024年4月～2025年3月)	
2024年6月28日	令和6年度第1回青藍会東京支部役員会 (南青山パソナスクエア)
2024年7月15日	令和6年度青藍会総会参加 (徳島大学青藍会館)
2024年11月10日	令和6年度関東眉山会参加 (KKRホテル東京)
2024年11月29日	令和6年度第2回青藍会東京支部役員会 (南青山パソナスクエア)
2025年3月8日	青藍会東京支部総会・講演会・懇親会 (KKRホテル東京)

また、井上恵理先生（53期）が新たに幹事に就任され、現在は下記の体制で役員会を運営しております。令和7年3月8日にKKRホテル東京にて開催しました青藍会東京支部総会・講演会では、昨年に比べ40期、50期代の会員の参加が増えました。

青藍会東京支部役員 (任期：2024年4月～2026年3月)			
2024年4月より新体制に！ 2025年4月1日時点			
支部長	石井 保夫	医学部39期	虎の門病院腎センター外科
副支部長	伊藤 滋朗	医学部44期	JR東京総合病院メンタルヘルス・精神科
事務局長	軒原 浩	医学部40期	国立国際医療センター呼吸器内科
名誉支部長	上田 茂	医学部20期	公益財団法人日本医療機能評価機構
顧問	濱本 恒男	医学部23期	南青山ひだまりクリニック
名譽幹事	森岡 久尚	医学部45期	徳島大学大学院医歯薬系研究部公衆衛生学分野
幹事	南海 昌博	医学部26期	南海クリニック
	川村 実	医学部27期	者健人一千代ケアセンター
	西村 光世	医学部27期	東都クリニック
	岡 慎一	医学部28期	国立病院機構 多摩全生園
	平井 慎二	医学部31期	国立病院機構下総精神医療センター
	牧本 敏	医学部38期	東京都小児総合医療センター
	筒井 勝	医学部40期	船橋市保健所
	金井 信雄	医学部43期	東京都健康長寿医療センター
	島津 太一	医学部46期	国立がん研究センターがん対策研究所
	井上 恵理	医学部53期	国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター
監事	伊藤 もとみ	医学部26期	東京毒物病院
	増野 智彦	医学部40期	日本体育大学保健医療学部救急医療学科

※ 令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

II. 今後の展望と課題

青藍会東京支部からの提案

令和7年度第1回青藍会東京支部役員会（2025年7月11日）

- ① 支部の区割りの再検討
特に東日本に関して

② 青藍会の法人化について

③ 青藍会報による学会の開催案内
(青藍会員が会長として開催される全国規模の学会)
ホームページでは掲載されているが、広く青藍会員に案内

④ 青藍会功労賞について
以前に、元京知事部長の長崎先生と元東京支部長の小松先生の表彰あり



青藍会の活動をさらに充実させるため、東京支部より上記の提案を行いました。今後も本部と密に連携を図り、精力的に支部活動を推進することで、青藍会全体の発展に寄与してまいりたいと存じます。

最後に、同窓会の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

近畿支部

近畿支部長

播 村 佳 昭 (医学部28期)

本年も総会に参加させていただき、懐かしい徳島を訪れることができました。

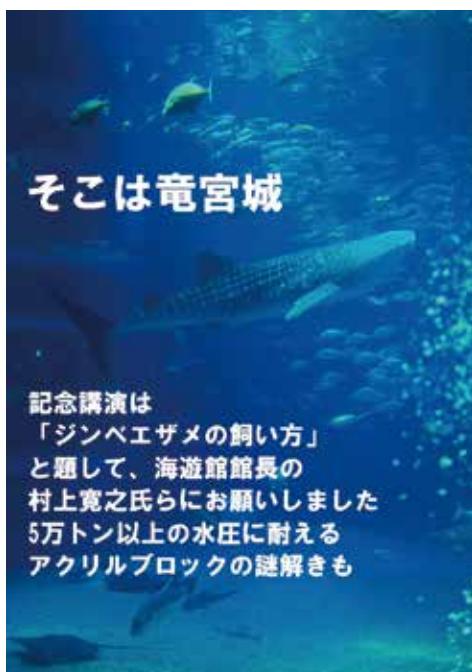
ここまででは、昨年と同じなのですが、ウケ狙いで恐縮ですが、大学病院前に阿波の銘菓の支店が開設されています。総会に出席した折には、お土産を購入します。お店の方に「大阪から買いに参りました」と申告するのですが、さすがに4回目です「毎年、海の日に来て下さいまして、ありがとうございます」と。



近畿支部報告（播村佳昭支部長）

令和7年の支部総会を本部総会の直前に開催しました。大阪は万博と称してごった返しの毎日で、当日々ブルーインパルスも飛んでくるわ、在阪球団がぶっちぎるわ、でカオスでした。記念講演のテーマが重要と考え、このたびは海遊館の村上寛之館長さんを招聘しました。演題は「ジンベエザメの飼い方」です。結論は「とても難しい」ことにつきました。しかし海は全てを飲み込み、あらゆる命を育みます。青藍会総会が海の日に開催される意義を感じました。

次年度は一層の盛会になるように、種々画策したいとおもいます。どうか会員諸兄妹にはご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



近畿支部総会案内チラシ

兵庫支部

兵庫支部長

小川達司(医学部31期)

7月21日海の日に総会で支部報告をしました。当
日は31期の同級生が5名（赤池、安藤、小川、小木
曾、三上）出席しており、心強く思われました。31
期は今年、卒後40年で高橋安毅君が幹事で11月23日
に徳島で同窓会の開催予定です。さて、5月12日に
世話人会を三宮「DERIRE」で行いました。9名の
参加があり、昨年10月に亡くなられた前支部長の植
林先生を追悼し、支部総会のプログラムを検討しま

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）



兵庫支部世話人会 令和7年5月12日
於 三宮「DERIRE」

した。招聘教授を母校整形外科の西良先生と兵庫医科大学上部消化管外科篠原先生に決定しました。いざれも全国に名が知れたBIG教授で研修医を含めた多くの先生方に参加願いたいです。もちろん本学の学生の方も大いに歓迎します。支部総会の開催地を姫路→尼崎→神戸と巡回する方針通り、今年は10月26日（日）12時～15時、シーサイドホテル舞子ビラ神戸で開催します。会費1万円。卒後5年まで67期～71期の先生と学生さんは無料ですのでぜひ参加ください。



兵庫支部報告（小川達司支部長）

愛媛支部

愛媛支部長

河崎秀樹（医学部26期）

愛媛支部（愛媛青藍会）における今年度からの主要役員と、現状および問題点について報告します。

20余年にわたり支部長（会長）を務められた久野梧郎先生（15期）が勇退され、本年度から河崎秀樹（26期）が引き継ぎました。これを機に役員も大幅に変更し、副支部長には加納嘉明先生（14期）が勇退され、原田雅光先生（28期）、兼松貴則先生（41期）、が就任しました。その他の役員では、総会議長に橋根勝義先生（34期）が留任、会計は横手亮二先生（34期）が勇退され二宮郁先生（45期）、村上太一先生（46期）が就任、さらに総会・親睦会世話人に菅政治先生（28期）、發知将規先生（43期）が就任しました。また愛媛支部の会報である「伊予路」の編集委員に米田浩二先生（24期）、原田雅光先生（28期）が留任となっています。以上の役員で支部の運営に携わりますので、今後とも宜しくお願ひ致します。

愛媛支部には現在209名の会員が在籍していますが、65歳以上の高齢者が約50%を占めています。私が大学から愛媛県立中央病院に赴任した1992年と比べますと、高齢化が大幅に進んでいます。最大の原因は1979年に開学した愛媛大学医学部が次第に充実し、地元の高校生の愛媛大学への進学が増えたことです。その結果、徳島大学への進学者が著しく減っており、今年度はわずか2名という有様です。

会員の高齢化は支部活動のアクティビティの低下を招いています。様々な連絡を送っても70～80名程度の返信にとどまっているのが現状です。連絡手段



愛媛支部報告（河崎秀樹支部長）

※ 令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

として従来からハガキを使用していましたが、時節柄 e-mail に変更する目的でアドレスの確認を行っていますが、返答率が低く切り替えに難渋しています。また以前は年一回の総会のほか、親睦会として新年会、夏のビール会、さらに各分野のエキスパート会員を講師にした勉強会を年数回開催していましたが、コロナ禍も災いしたことから昨年は総会と新年会のみの開催となっています。

将来にわたっても、若い会員が増える可能性は極めて低く益々の高齢化は避けられない状況です。愛媛支部としては、時代の変化を考慮しながら支部活動も相応に変容せざるを得ないものと考えています。

VI MD-PhD 奖励金授与

荒瀬会長から、令和7年度徳島大学大学院医学研究科（博士課程）MD-PhD コースに入学し、細胞生物学分野にて研究を行う浅野千帆莉さん、臨床薬理学分野にて研究を行う植田詩穂さんに青藍会MD-PhD 鼓励金が授与された。



VII 2024年度青藍会賞の発表および授与

青藍會賞受賞者學術講演

徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内
科学分野特任講師

三 橋 惇 志 先生 (医学部62期)

演題 「腫瘍内 fibrocyte の同定と新規がん治療標的としての展開」

座長 西岡 安彦先生 (25頁)

VIII 學術講演

徳島大学大学院医歯薬学研究部救急集中治療医学 分野教授

大藤 純先生（医学部43期）

演題「ARDSに対する人工呼吸管理」

座長 三 人 伸 次 先生 (20頁)



徳島大学大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野
教授

岩 佐 武 先生 (48期)

演題 「脳と生殖」

座長 萩 原 稔 先生 (23頁)



青藍会々則

第1章 名称

第1条 本会は、青藍会（徳島大学医学部医学科同窓会）と称する。

第2章 目的

第2条 本会は、会員相互の親睦を厚くし、学術の向上を図り、もって母校の発展に尽くすことを目的とする。

第3章 会員

第3条 本会の会員は、次の5種類とする。

- 1 正会員 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学及び徳島医学専門学校の卒業生並びに、徳島大学医学部医学科の在学生
- 2 名誉会員 本会に対し功労顕著にして評議員会で推薦した者
- 3 特別会員 次の一に該当する者を特別会員とする（ただし、正会員は除く。）
 - (1) 徳島大学大学院医歯薬学研究部医学系（栄養学分野を除く。）の教授、徳島大学病院長及び同病院医科の教授、徳島大学藏本事務部長並びにかつてその職にあった者
 - (2) 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学、徳島医学専門学校及びそれらの附属病院の教授、助教授、講師、薬剤部長、事務部長（医学部事務長）の職にあった者
- 4 準会員 前3項以外の者で、次の各号のいずれか一に該当する者のうち本会に入会を希望する者
 - (1) 徳島大学大学院医学研究科学生
 - (2) 徳島大学大学院医歯薬学研究部医学系（栄養学分野を除く。）及び徳島大学病院医科に在籍し、又はかつて在籍した者
 - (3) 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学、徳島医学専門学校及びそれらの附属病院に在籍した者
- 5 賛助会員 本会の発展に対して特別賛助があつたと評議員会で認められた者

第4章 役員

第4条 本会に、会務を処理するため次の役員を置く。

- | | |
|------|-----|
| 名誉会長 | 1人 |
| 顧問 | 若干名 |
| 会長 | 1人 |

副会長	3人
支部長	各支部1人
評議員	各期、各学年2人、及び支部長
執行幹事	若干名
監査	2人

第5条 役員は次により選任する。

- 1 名誉会長は、医学部長の職にある者を充てる。
- 2 顧問は、会長の任期を終えた者及び評議員会で推薦された者を充てる。
- 3 会長及び副会長は、評議員会の推薦により総会の承認を得て選任する。
- 4 支部長は、支部における正会員の中から選出する。
- 5 評議員は、各期、各学年の代表者及び支部長をもって充てる。ただし、各学年の代表者は総代及び副総代とする。
- 6 執行幹事は、評議員会の推薦により選出する。
- 7 監査は、評議員会の推薦により選出する。

第6条 役員は、次の職務を行う。

- 1 会長 本会を代表し会務を総理する。
- 2 副会長 会長を補佐し、会長事故あるときは、これを代理する。
- 3 支部長
 - イ 支部を主宰し、本部との間の連絡にあたり、支部の運営にあたる。
 - ロ 評議員としての職務を行う。
- 4 評議員 会員を代表し、諸般の会務を審議し、決定する。
- 5 執行幹事 評議員会において定められた会務を執行する。
- 6 監査 事務の管理執行を監査する。

第7条 役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 会長の任期は、原則として連続2期を限度とする。

第8条 役員は、任期終了後といえども後任者の就任するまでは、その職務を行うものとする。

第9条 役員は、すべて名誉職とする。

第5章 会議

第10条 会議は、次の4種類とする。

- 1 通常総会
- 2 臨時総会
- 3 評議員会

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

4 支部長会議

第11条 総会は、会長が招集し、その議長となる。

第12条 総会の議事は、出席正会員の過半数をもって決する。可否同数の場合は、議長がこれを決する。

第13条 通常総会は、年1回開き次の事項を審議する。

1 会務及び会員の現状報告

2 母校の現状及び将来計画の報告

3 収支決算報告及び収支予算の決定

4 その他評議員会において必要と認める事項

第14条 臨時総会は、評議員会において必要と認めた場合を開く。

第15条 評議員会及び支部長会は、会長が招集する。

第16条 評議員会は、評議員総数の過半数（委任状を含む）をもって成立し、評議員会の議事は出席評議員の過半数をもって決する。可否同数の場合は、議長がこれを決する。

第6章 委員会

第17条 本会は、必要に応じて各種委員会を置くことができる。

2 委員会の委員は、会長が委嘱する。

第7章 事業

第18条 本会は、第2章の目的を達成するために次の事業を行う。

1 会員名簿及び会報の発行

2 講演会及びその他の会合の開催

3 医学の教育及び研究の振興並びに会員の福祉

4 青藍会館の運営

5 その他評議員会において必要と認めた事業

第8章 会計

第19条 本会の経費は、会費、寄附金及びその他の収入をもってこれに充てる。

第20条 正会員は、会費として入会金2,000円、年会費5,000円（会報、名簿代を含む。）を納入するものとする。ただし、一括して20年分の年会費を納めた場合は、それ以降の年会費を徴収しない。

※ これまでの会費を全納していただいている会員に限ります。

2 前項の規定にかかわらず、医学科学生は入学時に入会金2,000円を納入し、在学中の年会費は免除する。ただし、卒業時に5年分の年会費を一括して納入するものとする。

3 正会員として卒業後50年を経過した者については、翌年度から年会費を免除するものとする。

第21条 本会会計の管理運用は、評議員会の決議による。

第22条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わるものとする。

第9章 本部及び支部

第23条 本会の本部は、徳島大学医学部青藍会館内に置く。

第24条 本会は、必要な地に支部を設置する。ただし、支部会の細則は別に定める。

第25条 会員は、住所、職業及び勤務先等に異動あるときは、その都度本部に通知するものとする。

第10章 級会

第26条 本会は、卒業年度毎に級会を組織し、代表者を若干名置くものとする。ただし、級会の細則は別に定める。

第11章 会則の改正

第27条 この会則の改正は、評議員会の議を経て総会で決する。

第12章 細則

第28条 この会則施行に関し、必要な細則は、評議員会の決議を経て別に定める。

附 則（昭和47年5月22日会則第3条改正）

この改正会則は、昭和47年5月22日から施行する。

（略）

附 則（令和6年7月15日会則第20条改正）

この会則は、令和6年7月15日より施行する。

事 業 報 告

令和6年度 事 業 報 告（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

[実 施 事 業]

令和6年4月5日（金）

医学部基礎第一講義室にて医学部医学科新入生歓迎会開催。入学生112名に荒瀬誠治会長よりご祝辞、大藤純先生、松井尚子先生より歓迎の言葉が送られた。会報第101号、同第102号、青藍会だより第5号を贈呈

令和6年5月17日（金）

医学科総代、副総代との懇談開催（青藍会館小会議室）

令和6年6月10日（月）

青藍会会報第103号発行（5,700部）

令和6年6月29日（土）

香川支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和6年7月15日（月）

令和6年度青藍会総会開催（ハイブリッド開催）

令和6年7月20日（土）

近畿支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和6年9月7日（土）

高知支部総会に参加（大串文隆副会長）

令和6年9月28日（土）

愛媛支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和6年9月30日（月）

徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付

令和6年10月6日（日）

兵庫支部総会に参加（荒瀬誠治会長・坂東智子副会長）

令和6年10月25日（金）

第41回青藍会・医学科講演会開催
「医学のレジリエンス～みらいへの挑戦と貢献～」

講師 大阪大学名誉教授 澤芳樹先生

令和6年12月11日（水）

青藍会会報第104号発行（5,700部）

令和6年12月13日（金）

青藍会奨励賞の授与（2024年度医学科3年次医学研究実習優秀者表彰）（荒瀬誠治会長、西岡安彦医学部長）

令和6年12月13日（金）

青藍会スポーツ奨励賞の授与（荒瀬誠治会長、西岡安彦医学部長）

令和7年1月14日（火）

医学科4年生に白衣授与・臨床実習生（医学）認定証授与式に出席（荒瀬誠治会長）

令和7年2月1日（土）

岡山支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和7年3月8日（土）

東京支部総会に参加（荒瀬誠治会長、西岡安彦医学部長、香美祥二病院長）

令和7年3月10日（月）

青藍会だより第6号発行（1,700部）

令和7年3月25日（火）

第72回卒業式に参加（荒瀬誠治会長）

医学部71期生（112名）に記念品（スクラブ、会報第103号、同第104号、祝ご卒業、青藍会だより第6号）贈呈

令和6年度医学部各賞授与式にて、荒瀬誠治会長より代表者へ卒業記念品

[会 議 の 開 催]

令和6年5月14日（火）

広報委員会（Zoom会議）

（1）青藍会会報第103号の編集について

（2）青藍会会報第103号のホームページ公開・非公開（案）について

（3）青藍会会報第104号（令和6年12月発行予定）の掲載内容について

（4）青藍会だより第6号（令和7年4月発行）について

（5）その他

令和6年6月26日（水）

役員会（Zoom会議）

（1）青藍会会則の改正について

（2）各支部への経費支援について

（3）青藍会役員の改選について

（4）名誉会員の推薦について

（5）令和6年度医学部・病院教育研究助成金について

（6）医学部創立80周年記念事業への寄付について

（7）令和6年度青藍会総会について

（8）その他

令和6年7月15日（月）

令和6年度青藍会総会・評議員会・支部長会議（ハイブリッド開催）

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

- 会議終了後、青藍会賞受賞者学術講演及び学術講演を実施
内容は会報第104号に掲載
- 令和6年8月26日（月）
役員会（Zoom会議）
(1)青藍会会報第104号の編集について
(2)青藍会だより第6号の発行について
(3)徳島大学同窓会連合会のニュースレター投稿への推薦者について
(4)令和6年度卒業生への記念品について
(5)医学科6年生の個人情報の提供について
(6)医学科6年生に対する会費納入のお願いについて
(7)令和6年度（第41回）青藍会・医学科講演会について
(8)青藍会スポーツ奨励賞について
(9)青藍会奨励賞の授与について
(10)その他
- 令和6年10月7日（月）
青藍会講演会実行委員会
(1)第41回青藍会・医学科講演会について
(2)講演会実行委員会委員長の選任について
(3)その他
- 令和6年11月25日（月）
財務健全化委員会（メール審議）
(1)青藍会事務職員の給与改定（案）について
- 令和6年11月25日（月）
広報委員会（Zoom会議）
(1)青藍会会報第104号の編集について
(2)青藍会会報第104号のホームページ公開・非公開（案）について
(3)特別寄稿（恩師の近況）の原稿依頼について
(4)青藍会会報第105号（令和7年6月発行予定）の掲載内容について
(5)青藍会会報の編集作業について
(6)その他
- 令和7年1月17日（金）
学術講演講師選定委員会（メール審議）
(1)令和7年度青藍会総会学術講演講師候補者について
- 令和7年1月20日（月）
講演会実行委員会
(1)第41回青藍会・医学科講演会の実施結果について
①出席者数
②決算
- (2)第42回青藍会・医学科講演会の実施計画について
①開催日時・場所について
②講師について
③座長について
④予算案について
(4)その他
- 令和7年2月5日（水）
青藍会賞選考委員会
(1)2024年度青藍会賞の選考について
(2)2025年度青藍会賞の募集について
(3)その他
- 令和7年2月26日（水）
役員会（Zoom会議）
(1)青藍会会報第105号の編集について
(2)青藍会だより第6号の発行について
(3)徳島大学びざん会ニュースレター投稿への推薦者について
(4)青藍会役員の選出について
(5)各支部への経費支援について
(6)青藍会MD-PhD奨励金の授与について
(7)2024年度青藍会賞について
(8)令和7年度新入生歓迎会について
(9)令和7年度青藍会総会について
(10)令和7年度（第42回）青藍会・医学科講演会について
(11)その他
①令和6年度徳島大学卒業式、令和7年度入学式について
②青藍会スポーツ奨励賞について
③事務局職員の給与改定について
④青藍会徳島支部・徳島大学支部合同支部会について

令和7年度 事業計画

- 1 新入生歓迎会（4月7日）
- 2 青藍会会報第105号（6月）・第106号（12月）発行
青藍会だより第7号（4月）発行
- 3 総代・副総代との懇談会
- 4 2025年度青藍会賞募集
- 5 青藍会総会・評議員会・支部長会（ハイブリッド開催）（7月21日）
- 6 青藍会MD-PhD奨励金授与・青藍会賞授与（7月21日）
- 7 徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付
- 8 第42回青藍会・医学科講演会（10月23日）
- 9 青藍会奨励賞授与（12月12日）
- 10 青藍会スポーツ奨励賞の授与（12月12日）
- 11 白衣授与（医学科4年）（1月）
- 12 卒業生への記念品贈呈（3月）
- 13 役員会・各種委員会の開催
- 14 青藍会各支部総会への本部役員派遣
- 15 青藍会館の管理・運営
- 16 その他



おかげをもちまして、無事に令和7年度青藍会総会を開催することができました。
会員の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。 青藍会事務局一同

学術講演抄録

ARDS 患者の人工呼吸管理

徳島大学大学院医歯薬学研究部
救急集中治療医学分野
教授 大 藤 純（医学部43期）

はじめに

令和7年度青藍会総会の学術講演にて登壇の機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。私は1997年に徳島大学医学部を卒業後、徳島大学麻酔科学教室に入局し、高松赤十字病院麻酔科、聖隸浜松病院麻酔科・救急科にて研鑽を積み、2002年に徳島大学病院麻酔科から集学治療病棟に配属となりました。

2011年からの米国留学を経て、2014年より徳島大学病院救急集中治療部講師、2016年より徳島大学病院ER・災害医療診療部特任教授を務め、2020年8月より救急集中治療医学分野教授に就任し、現在に至ります。教授就任当初はコロナ禍の真っただ中であり、当診療科には多くの重症呼吸不全患者（コロナ感染による急性呼吸窮迫症候群：ARDS）が搬送され、医局員とともに重症ARDS患者の診療に追われる日々を過ごしました。本講演では、救急集中治療医学分野の現況とともにARDS患者の人工呼吸管理について紹介させていただきます。

救急集中治療医学分野について

診療

当診療科の歴史は、2003年4月に徳島大学大学院病態情報医学講座救急集中治療医学が開設されたところから始まります。同年4月より、附属病院の救急部および集中治療部の併合により徳島大学医学部歯学部附属病院救急集中治療部として組織されました。救急集中治療部は Intensive Care Unit (ICU) 10床、High Care Unit (HCU) 20床の計30床から開始し、平成17年9月より、HCU の一部を脳卒中センター (Stroke Care Unit, SCU : 9床) として運用を開始しました。徳島大学病院救急集中治療部では、開設当初から、従来までの臓器別診療科の主治医が治療方針を決定する open ICU 方式ではなく、ICU 専従医が治療方針を決定する closed ICU 方式を採用していました。重症患者の管理は、多臓器横断的な医学的知識や高度医療機器の運用および急激な病態変化にも対処できる診療能力が必要です。そのため、常にベッドサイドで診療を継続する ICU 専従医が治療方針の決定に責任を持つことが、重症患者の救命及び機能予後の改善に繋がることは、多くの研究で示さ

れています。診療内容としては、ARDS をはじめとした急性呼吸不全、急性冠症候群や心筋症などの急性循環不全、敗血症性ショック、急性腎障害、大手術後管理、先天性心疾患術後などの重症小児症例、免疫不全患者の重症感染症や多臓器不全、広範囲熱傷の管理など、多岐にわたります。中でも、重症呼吸不全患者に対する体外式膜型人工肺（ECMO）を用いた呼吸管理、食道内圧モニターや電気的インピーダンストモグラフィー（EIT）を用いた ARDS への肺保護戦略は、高度先進医療として注目すべきものです。また、2010年4月より、徳島県の寄付講座である ER・災害医療診療部が徳島大学病院に開設されました。ER・災害医療診療部は、高度救命救急センターである徳島県立中央病院と特定機能病院である徳島大学病院により構成される総合メディカルゾーン構想の中で、両病院の橋渡しとなるべき役割を担うものです。徳島大学病院は、特定機能病院として、他院からの重症患者の受け入れは多く、特に総合メディカルゾーンを通じて、県内の重症診療の最後の砦としての役割を担っています。その象徴となる出来事として、2019年に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが挙げられます。徳島大学病院は県内唯一の重症 COVID-19 患者の受け入れ医療機関として機能し、100症例を超える重症患者を受け入れ、70症例を超える人工呼吸患者や ECMO 装着患者の管理に携わりました。

教育

救急集中治療科が担当する重症患者は、多領域に及ぶ複雑な疾患や病態を有するため、臓器横断的な医学的知識が必要です。一方で、近年の救急診療の発展は目覚ましく、ER 診療のみならず、ドクターヘリの活用や救急救命士の活動を指揮するメディカルコントロールといった病院前救護（プレホスピタルケア）に精通した救急医の育成も重要な課題です。当診療科では、臨床実習の半分を県立中央病院 ER や消防署の救急車同乗実習に費やし、残り半分を徳島大学病院の集中治療室で実習を行っています。救命救急センターである県立中央病院 ER と有数の closed ICU をもつ徳島大学病院で研修できる環境は、他にあまり類を見ない充実したものとなっています。専門研修においても、救急科専門医と集中治療専門医の取得を必須とし、病院前救護や ER 診療に加えて、重症患者管理にも対応できる、急性期医療のオールラウンダーの育成に重点を置いています。

研究

当診療科では、人工呼吸管理に関する研究や重症患者の機能予後に多大な影響を与える集中治療後症候群（Post-Intensive Care Syndrome: PICS）対策

に関する研究を行っています。本稿では、コロナ禍において多く経験した ARDS に対する人工呼吸管理について述べたいと思います。

ARDS における呼吸不全の病態と人工呼吸器誘発性肺傷害

ARDS 肺では、傷害肺が主に背側に分布し、逆に腹側肺の一部は過膨張を呈するなど、正常肺と傷害肺が混在する不均一性が特徴です。換気に寄与する健常肺は少ないことから baby lung と呼ばれます。この様な病的肺に、健常者と同様の換気を行うと、過剰な肺胞伸展圧 (stress) による傷害や肺の高度な歪み (strain) による傷害を生じます。また、健常肺と虚脱肺の境目では、呼吸相に伴って、肺の虚脱と再開放に伴う剪断力 (share stress) による傷害が生じます（図 1）。この様に、不適切な陽圧換気により肺傷害を誘発するものを人工呼吸器誘発性肺傷害 ventilator-induced lung injury: VILI と呼びます。ARDS における人工呼吸管理の要点として、VILI を避ける呼吸管理、すなわち、プラトー圧や一回換気量、駆動圧を制限し、中等度以上の PEEP (概ね $PEEP \geq 10 \text{ cmH}_2\text{O}$) により、肺の虚脱を防ぐ肺保護戦略に基づいた呼吸管理を行うことです。

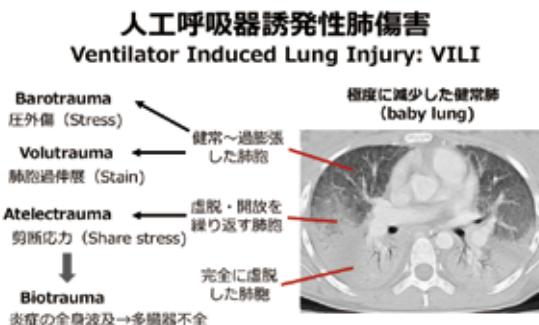


図 1 人工呼吸誘発性肺傷害の病態

自発呼吸誘発性肺傷害 (patient self-inflicted lung injury: P-SILI) と人工呼吸誘発性横隔膜機能傷害 (ventilator induced diaphragmatic dysfunction: VIDD)

肺病変の不均一性に起因した肺傷害は、陽圧換気によらず、強い自発呼吸によっても誘発され、自発呼吸誘発性肺傷害 (patient self-inflicted lung injury: P-SILI) と呼びます。肺胞伸展圧は、経肺圧 (経肺圧 = 気道内圧 - 胸腔内圧) が指標となります。強い自発呼吸では、横隔膜の運動により、胸腔内圧が強い陰圧となります。そのため、気道内圧を軽減させても経肺圧は増加し、肺傷害を来す可能性があります。また、強い吸気努力で胸腔内圧が陰圧となり、胸腔内の血流増加から肺水腫を助長します。そのため、呼吸努力が強い場合は、P-SILI 予防の観点からも気管挿管のタイミングを逸しないことが重要です。

また、人工呼吸器の補助が強すぎる場合や不適切な PEEP 設定では、横隔膜の萎縮や筋繊維の急激な引き延ばしによるサルコメアの障害により人工呼吸誘発性横隔膜機能傷害 (ventilator induced diaphragmatic dysfunction: VIDD) を引き起します。一方、人工呼吸の補助が不足し、強い努力呼吸が続く場合には、横隔膜に過度な負荷がかかることで筋損傷を生じ、横隔膜機能が低下する負荷誘発性横隔膜機能傷害 (load-induced diaphragm injury) を発症することも知られています。よって、自発呼吸を温存した人工呼吸管理を行う際には、適切な呼吸ドライブの制御が重要となります。比較的ベッドサイドで簡便に実施できるものとして、気道閉塞圧 (airway occlusion pressure: $P_{0.1}$) や最大気道内圧変動 (airway pressure swing during a whole breath occlusion: ΔP_{occ}) による呼吸ドライブの評価があります。その他、横隔膜の収縮の度合いを横隔膜エコー検査で評価することも可能です（図 2）（高島拓也、大藤 純、著：横隔膜機能の評価方法と筋力維持の戦略～横隔膜機能評価と横隔膜保護換気～：LiSA 2024）。

横隔膜機能評価：エコー検査

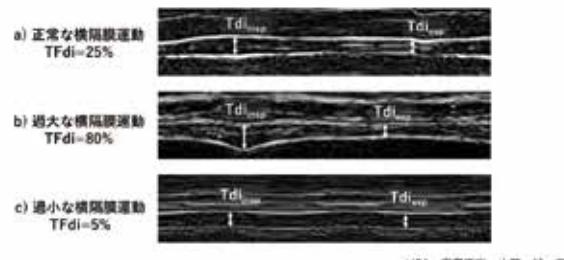


図 2 横隔膜機能評価：横隔膜エコー検査

ARDS に対する治療戦略

腹臥位療法

腹臥位療法は、中等症から重症の ARDS 患者において、予後改善効果が期待できる治療法です。ARDS の病態は、非心原性肺水腫であり、水を含んだスポンジのように、背側肺に水分が移行し、背側肺は虚脱し、腹側肺は過膨張となりやすいのが特徴です。腹臥位では、虚脱した背側肺が再開放し、体積の小さい腹側肺の一部が虚脱するため、相対的に虚脱肺の体積は少なくなります。虚脱肺の減少により、肺内シャントの減少と換気血流比の改善から、酸素化は著明に改善します。また、腹臥位では、再開放した背側肺は、脊椎や胸郭の影響で過膨張とはなりにくく、結果的に換気分布が肺野全体に均一となり、肺保護的な換気となります。

換気の分布を評価する方法として、当診療科では、電気インピーダンストモグラフィー (EIT) を導入しています。EIT とは、電極チャネルを胸部に装

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

着し、生体内インピーダンス変化を測定し、動的な呼吸メカニクスを可視化したものですが、ベッドサイドにて肺内の換気分布や呼吸器設定変更前後のインピーダンス変化から、肺の過膨張や虚脱の評価、また強い自発呼吸の際に認める振り子現象を観察することができます。



図3 電気インピーダンストモグラフィー (electrical impedance tomography: EIT) による呼吸ダイナミクスの評価

体外式膜型人工肺 extracorporeal membrane oxygenation: ECMO

ECMOは、膜型人工肺を組み込んだ体外循環装置を用いて、呼吸・循環補助を行う治療法です。重症呼吸不全症例では、呼吸ECMO（静脈-静脈 ECMO: VV-ECMO）によって、傷害肺に代わって呼吸を補助してVILIやPSILIを予防し、原疾患が治癒するまでの治療時間を稼ぐことができます。呼吸ECMO管理の要点としては、①許容できるSa_O2 (80 ~ 95%)を維持するECMO流量とし、スイープガス流量を調整して呼吸促拍を避ける、②過剰な輸液負荷を避け、可能な限りdry sideでの管理とする、③十分な心拍出量とHbを維持することです。また、重症呼吸不全の回復には、一定期間必要であり、出血や回路内血栓などの合併症を回避して長期間にわたり管理できることが重要です。重症呼吸不全へのECMO管理は、高度な技術や経験を要し、多くのマンパワーと医療資源を必要とするため、その適応には慎重かつ総合的な判断が必要となります。

重症コロナ患者: ECMO治療の様子

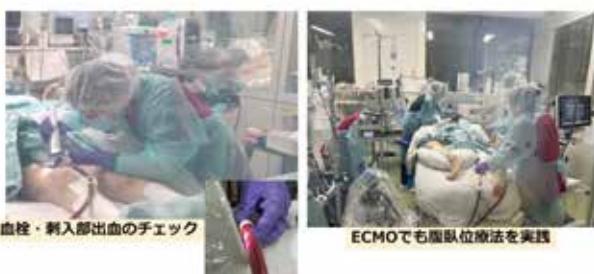


図4 重症コロナ肺炎患者へのECMO治療の様子

その他、集中治療後症候群 (PICS) 対策

重症ARDS患者の治療は時に長期化し、たとえ患者の救命に成功しても、集中治療を受けている間の合併症により、長期にわたりICU退室後のQOLが損なわれる場合があり、集中治療後症候群 (PICS) と呼ばれます。PICSは、主に身体機能・認知機能・精神機能の長期にわたる障害からなり、患者家族のメンタルヘルス障害も含まれます (PICS family)。PICSの予防策として重要なことは、適切な原疾患の管理、人工呼吸などの侵襲的治療からの早期脱却、せん妄予防、早期離床・リハビリを通じて、早期にICU診療から離脱することです。当診療科では、ICU患者の身体機能に関する研究として、人工呼吸患者の筋肉量は入室後1週間以内に減少すること (Nakanishi, Oto, et al. Intensive Care Med 2018)、筋肉の電気刺激療法の有用性に関する研究 (Nakanishi, Oto, et al. Crit Care Med 2020)、筋萎縮のバイオマーカーに関する研究 (Nakanishi, Oto, et al. Crit Care Med 2020)、下肢の振動療法の有用性に関する研究 (Doi, Oto, et al. Crit Care Med 2024)、また認知・精神機能障害の原因ともなる睡眠障害に関する研究 (Oto, et al. Intensive Care Med 2012)などを集中治療領域での著名な学術誌に誌上発表しています。

おわりに

救急集中治療医学分野の診療、教育、研究について簡単に紹介させていただきました。重症ARDSの呼吸管理には、高度な呼吸・循環管理を含む全身管理の技術と原疾患に対する治療に加えて、多くのマンパワーと多職種連携が必要です。最先端の重症管理を実践する上で、集中治療の知識と経験を持った集中治療専門医がリーダーシップを発揮し、診療をリードすることが求められます。また、重症ARDS患者への急性期治療のみならず、ICU退室後の精神的・身体的後遺症に対するフォローアップも重要です。今後、救急診療や集中治療を通じて、徳島県下の救急診療ネットワークを構築し、徳島県の急性期医療を支え、徳島県を守ってゆくことが当診療科の使命と考えております。青藍会の先生方に、ご指導ならびにご厳達のほど、よろしくお願いいたします。

脳と生殖

徳島大学大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野
教授 岩 佐 武（医学部48期）

はじめに

令和7年7月21日に開催された青藍会総会において、学術講演のご機会をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、当日の発表内容についてまとめさせていただきます。私は平成14年に徳島大学医学部医学科を卒業し、ただちに苛原 稔教授が主宰する産婦人科教室に入局しました。入局2年目には大学院に進学し、以後現在に至るまで脳が生殖機能において果たす役割について研究を続けています。此の間、生殖医療技術は飛躍的に発展し、不妊に悩む多くのカップルに利益をもたらす反面、様々な医学的・倫理的課題が浮き彫りとなっていました。これらを解決するには、今一度生物本来の機能に立ち返って考える必要があるのかもしれません。以下に生殖医学の発展の歴史と今後の課題について、我々の研究成果を含め「脳と生殖」という視点から解説致します。

生殖医学の発展と課題

生殖内分泌学の進歩が生殖医療の発展に多大に貢献してきたことは、広く知られた事実です。中でも視床下部から産生・分泌されるGnRHの存在が明らかとなり、GnRHを中心とした生殖内分泌機構が解明され、それらを自在に制御できるようになったことが、生殖医療の成績、安全性、汎用性を飛躍的に高めました（図1）。これにより、生殖医療に

よって生まれてくる子どもの数は7万人を超え、全出生の10%以上を占めるまでになっています（図2）。また、生殖医療の技術を応用した治療法も数多く提唱されており、治療成績の向上や重篤な疾患の発症の回避を目的とした着床前遺伝学的検査、がん治療前に卵子・精子や胚を凍結保存する妊娠性温存療法、および卵子・精子提供による生殖医療などが日常的に行われる状況となっています。一方、技術の発展に伴い「これらがどこまで許容されるのか」という新たな課題が浮上しており、我々医療者は医学的および倫理的視点から医療のあり方について再考する必要性に迫られています。これに対して、様々なアプローチの仕方があると思いますが、私は研究を通じて生物本来の機能について知識を深めることができその一助になると考えています。以下、我々がこれまで行ってきた研究と、そこから得た気づきについて述べさせていただきます。

脳と生殖に関する研究

上述の通り、我々は脳の視床下部が生殖機能に果たす役割について、GnRH分泌制御機構に焦点をあてて検討を続けてきました。一連の研究により、①視床下部は種々の生理機能の中枢を担うほか、②生体の置かれた環境に応じてこれらを包括的に制御していること、③生体環境が悪化した状況では重要度の高い機能が優先され、生殖機能は一時的に抑制されること、④これらの機序において視床下部のGnRH分泌制御機構が重要な役割を果たしていることを明らかにしました。このように、排卵障害や不妊症の一部は生体防御反応の一環として生じ

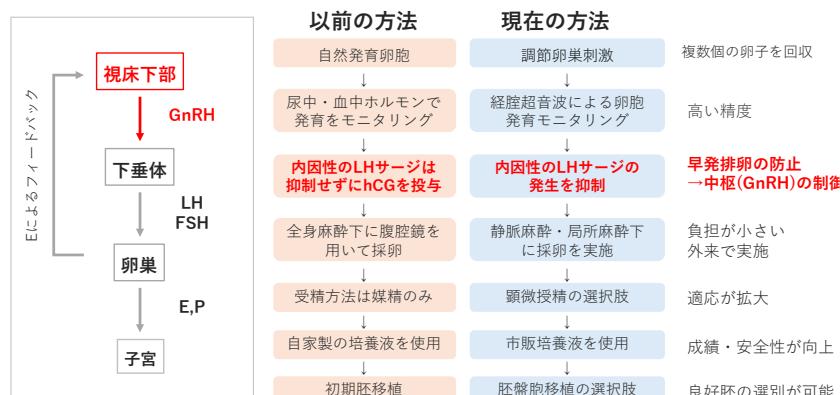


図1 生殖補助医療の発展の歴史

図1 生殖補助医療の発展の歴史

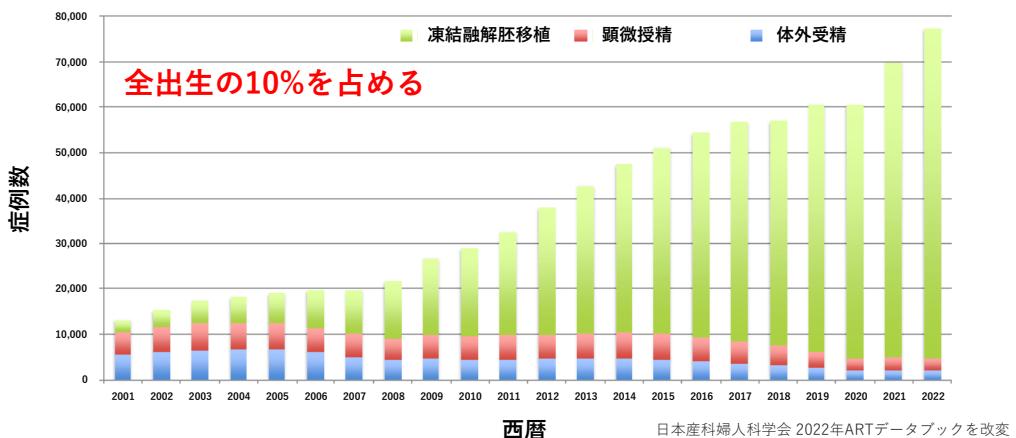


図2 生殖補助医療による出生児数

ている可能性があり、根本的な解決を図らないまま生殖医療に頼っている現在の状況について、今一度考え直す必要があると考えられます。また、近年では生殖に対するモチベーションの低下が危惧されていることから、我々は生殖行動を司る脳の機能についても検討を続けています。かねてより、排卵機構と生殖行動を同時に制御する因子の存在が想定されてきましたが、近年のヒトを対象とした検討から、GnRH促進因子のkisspeptinがその役割を担っているのではと考えられるようになりました。これに関して我々は実験動物を用いた検討により、①雄ラットに対してkisspeptinを投与すると、雌ラットに対する求尾行動が増加すること、②これに伴い(kisspeptinを投与していない)雌ラットの誘惑行動も増加すること、③一方、kisspeptinの投与により最終的な交尾行動は変化しないことを明らかにしました。すなわち、kisspeptinはGnRH分泌を介して排卵周期を維持する一方、妊娠の可能性が最も高い

い時期に生殖行動の一部を高める役割を担っていると考えられます(図3)。生殖医療によって補完できる排卵障害に比べ、生殖に対するモチベーションの低下は人類の存続にとって極めて重要な問題といえます。その意味で、生殖行動に関する研究の重要性は今後ますます高まると思われます。

さいごに

令和2年に産科婦人科学分野の教授に就任してから、すでに5年が経過しました。教授としての役割をしっかりと果たせているか自信は持てませんが、大過なく過ごせているのは、ひとえに青藍会をはじめ周囲の皆様のお力添えがあつてのことと感謝しております。私がそうしていただいたように、後進に対して臨床、研究の魅力をしっかりと伝えていくことが我々の任務と考えておりますので、青藍会会員の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

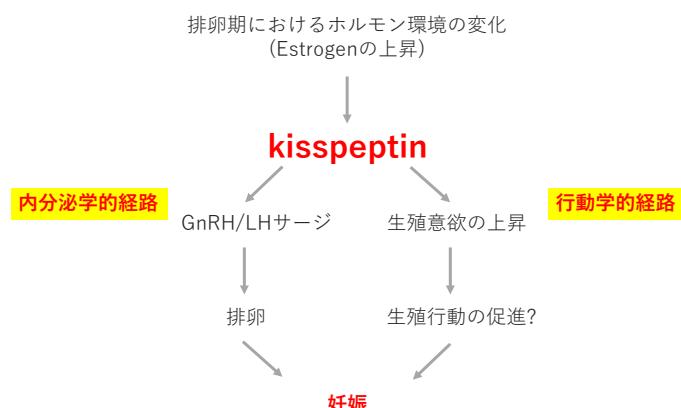


図3 生殖行動のコンセプト

2024年度青藍会賞の授与及び受賞講演

2024年度青藍会賞選考過程について

役員会学術委員

久保 宜明（医学部34期）

第32回2024年度青藍会賞の選考委員会を、令和7年2月5日、青藍会館小会議室にて開催しました。今回は4名の応募があり、青藍会から事前に依頼しました6名の選考委員の先生方に書面審査をお願いし、その結果により、当日、出席可能であった4名の選考委員による合議審査が行われました。なお、今回の選考委員長には委員間の互選により西村明儒先生が選出されました。

4名からの応募はいずれも優れた研究業績であるという評価でしたが、論文内容の質および今後の研究の発展性について総合的な観点からの選考がなされ、全員一致で以下の1名を青藍会賞の受賞対象者として選考し、令和7年2月26日に開催された役員会において、審議の結果、承認されました。

来年も引き続き積極的な応募をよろしくお願ひいたします。

受賞者

三橋 悠志 氏（医学部62期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部
呼吸器・膠原病内科学分野 特任講師



令和7年度青藍会総会にて

「腫瘍内 fibrocyte の同定と新規がん治療標的としての展開」

徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野 特任講師

三橋 悠志（医学部62期）

はじめに

この度は青藍会賞を賜り、大変光栄に存じます。青藍会会長である荒瀬誠治先生をはじめ、青藍会の皆様、これまでご指導・ご協力を頂きました先生方に深く御礼申し上げます。この度、私どもが呼吸器・膠原病内科学分野にて取り組んで参りました fibrocyte という細胞群が腫瘍内で担う機能についての研究成果につきまして、ご紹介させて頂きます。

Fibrocyte によるがん促進作用

Fibrocyte は单球系細胞でありながら細胞外基質（extracellular matrix: ECM）産出能を有する細胞群として同定され、主に肺線維症などの線維性疾患への寄与が報告されてきました。一方で、悪性疾患における fibrocyte の機能については明らかにされておらず、私たちは血管新生阻害薬である抗 VEGF 抗体の治療耐性獲得機序として、別の血管新生因子である FGF2 を高発現する fibrocyte が、CXCR4/CXCL12 シグナルを経て腫瘍へ集積す

令和7年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

ることを発見しました（Mitsuhashi A, et al. *Nat Commun.* 2015）。さらに、fibrocyte が CCL18 や PAI-1 といった液性因子を産出し、がん幹細胞様性質誘導と、マウスモデルにおける腫瘍生着を促進させることができました（Saijo A, Mitsuhashi A, et al. *Cancer Lett.* 2018.）。臨床肺がん組織でも関連した結果が得られており、fibrocyte が血管新生誘導や、がん細胞生存を介して腫瘍進展を促進している可能性が示されました。

腫瘍内 fibrocyte の同定とがん免疫における機能

一方で、fibrocyte は抗原提示細胞としての機能も有しており、現在のがん治療において中心を担う免疫チェックポイント阻害薬（immune checkpoint inhibitor, ICI）の治療効果との関連性に着目しました。マウス肺やヒト末梢血から培養を経て回収した fibrocyte が免疫チェックポイント分子である PD-L1 と共刺激分子である CD86 を高発現しており、抗 PD-L1 抗体により共刺激を介して T 細胞増殖を促進することを明らかにしました（Tania A, Mitsuhashi A, et al. *J Immunol.* 2021）。さらに、マウスモデルで皮下移植腫瘍近傍に fibrocyte を移植することで、抗 PD-L1 抗体による抗腫瘍効果や T 細胞増殖が亢進することを報告しました（Mitsuhashi A, et al. *Cell Rep.* 2023）。これらの成果から、fibrocyte は液性因子産出により腫瘍を促進する一方、ICI 治療時には抗原提示細胞として腫

瘍を抑制するという二面性を有すると考えられました（図 1）。

このように腫瘍における fibrocyte の重要性がわかりましたが、これまでその分画を臓器より直接生細胞として分離した実例・手法が乏しい状況が続いていました。そこで、腫瘍内 fibrocyte 分画をより詳細に探索するため、マウスモデルより腫瘍組織内 CD45 陽性血球系細胞を回収し、シングルセル RNA-sequence を実施しました（図表 2）。その結果、ECM を高発現する fibrocyte 様分画の同定に成功するとともに、特異的に発現する細胞表面マーカー探索により CD45 および CD34 二重陽性分画として fibrocyte の分離が可能となりました。さらにこの腫瘍から分離した fibrocyte は、抗原提示能を有するとともに、TGF- β 刺激により筋線維芽細胞様へと分化することがわかりました。このことから、fibrocyte は腫瘍進展において重要とされるがん関連線維芽細胞（cancer-associated fibroblast, CAF）の前駆体である可能性が考えられ、実際に分化誘導因子である TGF- β /SMAD 経路の阻害により腫瘍内 CAF の減少が確認されました。以上の結果を踏まえ、①血管新生阻害薬により腫瘍内へ fibrocyte を誘導する、② fibrocyte の抗原提示細胞としての機能を ICI により増強する、③ fibrocyte から CAF への分化を TGF- β 阻害薬で抑制するという治療薬の複合により、fibrocyte の抗腫瘍免疫作用を向上させる新たな治療法が示唆されました（図表 3）。

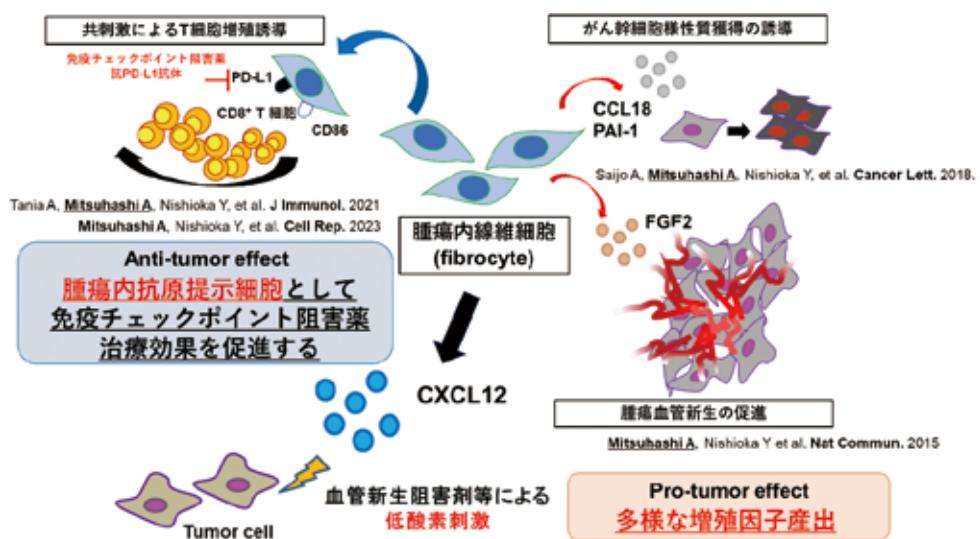


図 1 fibrocyte による腫瘍制御機能

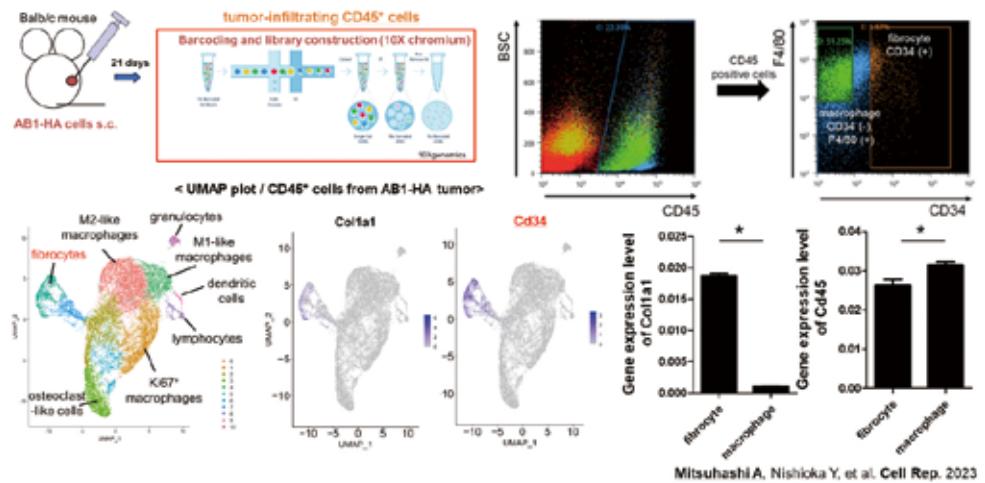


図2 single cell RNA シーケンスによる腫瘍内 fibrocyte の同定と分離

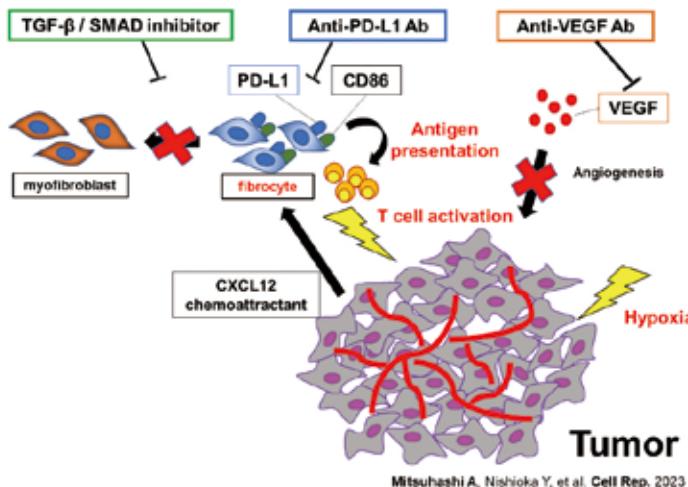


図3 腫瘍内 fibrocyte の制御を目指した複合がん免疫療法

Fibrocyte とがん免疫排除

ICIの耐性化メカニズムとして、 α SMA陽性CAFとECMがT細胞の侵入を阻む免疫排除という現象が知られています。この言わば「がんの鎧」を標的とすることで免疫排除の克服が期待されます。私たちはfibrocyteこそがCAFへの分化とECM産出を経て免疫排除の原因となる可能性を考え、関連した3つの治療標的を設定し、がんの鎧を解除する研究を創発的研究支援事業に採択の下で遂行しております（図表4）。

第一の標的として、fibrocyteからCAFへの分化阻害を目指します。この実現のため分化制御因子を探査したところ、腫瘍内fibrocyteでは日内変動を司る時計遺伝子群の制御下にある遺伝子が特徴的に発現していることを発見しました。実際にマ

ウス腫瘍由来fibrocyteに対し、時計遺伝子阻害薬KL001を作用させたところCAFへの分化を抑制しました。さらにマウスモデルでも、時計遺伝子阻害薬で腫瘍進展は抑制され、腫瘍辺縁の α SMA陽性CAFの壁が失われてT細胞浸潤が促進されました。このことから、時計遺伝子がfibrocyte分化制御を介した免疫排除の克服に有用と考えられました（Mitsuhashi A, et al. *NPJ Precis Oncol*. in press）。

次に第二の標的として、fibrocyte自体に至る分化や機能を制御することで免疫排除の構築阻害を目指します。この達成のため、長らく不明であったfibrocyteにおけるmaster regulatorの同定に挑戦しています。私たちはマウス腫瘍よりfibrocyteを回収する独自の成果により、ATAC-seqにてfibrocyteにおいて重要な機能を担う転写因子の同

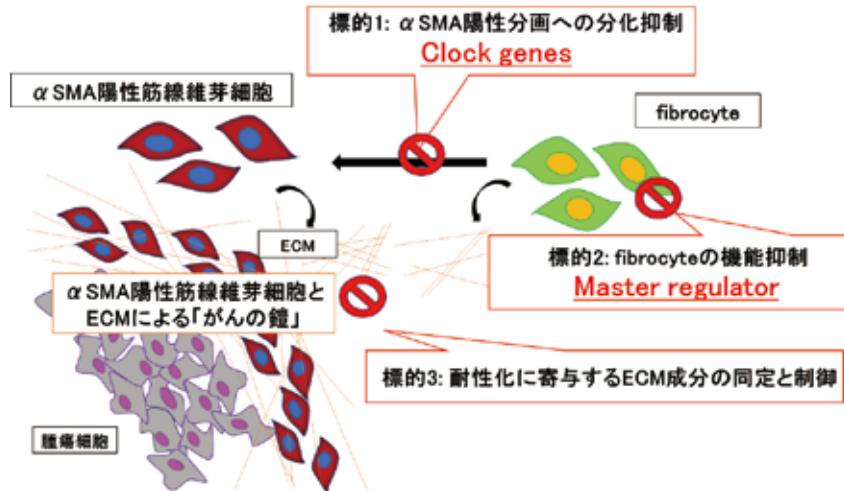


図4 腫瘍内 fibrocyte による免疫排除形成と治療標的

定を試みました。その結果、候補となる遺伝子を同定しており、ヒト単球に遺伝子導入することで ECM 高発現という fibrocyte 様性質を獲得することを明らかにしました。

さらに第三の標的として、fibrocyte や CAF とともにがんの鎧を形成する要素である ECM に注目し、免疫排除に寄与する成分と産出源の同定を行っています。ICIへの耐性を示す腫瘍組織に対して脱細胞化処理を行い、ECM 成分のみを抽出したところ、高密度の ECM 構造を呈することがわかりました。この ECM 成分を質量分析で解析・同定し、マウス腫瘍に強制発現することで ICIへの耐性化を確認しています。以上より、fibrocyteを中心とした3つの標的を狙った新規治療を開発することで、免疫排除および ICI 耐性の克服が見込まれます。

最後に

この度の青藍会受賞となった研究遂行に際しまして、多くの先生方より多大なご指導・ご支援を頂きました。Fibrocyte に関するご指導を頂くとともに、研究展開の機会を多く頂きました現教授の西岡安彦先生、がん研究を志すきっかけを与えて頂きました前教授の曾根三郎先生をはじめ、呼吸器・膠原病内科学分野の先生方、技術・教務補佐員の皆様、研究協力を頂いている学部生・大学院生の皆様に改めて心より御礼申し上げます。また、胸部・内分泌・腫瘍外科教授の滝沢宏光先生をはじめ、青藍会の先生方との共同研究により、本研究が加速的に進展いたしましたことに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

青藍会賞募集

2025年度青藍会賞募集

2025年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために、若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1. 応募資格

2025年12月末現在で42才未満の青藍会正会員。なお、当該年齢に達する以前に産前産後の休暇取得または未就学児を養育していた場合は、その期間を加えた年齢未満とする。

但し、2025年度までの会費完納入者であること。

2. 審査対象

2021年1月から2025年12月までの研究業績を対象とします。

なお、選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3. 応募締切

2026年1月13日（火）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4. 応募手続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（原本とそのコピー10部をご用意下さい）

1. 申請書（別紙様式1）
2. 履歴書（略歴）（別紙様式2）
3. 主指導者の推薦状（別紙様式3）
4. 原著論文（2021年1月～2025年12月末に発刊された原著論文；通し番号をつけ、年代の近い順に記載し、主たる論文3編には通し番号に○をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式4）
5. 主たる論文3編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式5）
6. 主たる論文3編の別刷り（コピー可）
7. 競争的資金の獲得状況（2018年1月～2025年12月末までに獲得した研究費の名称、研究期間、研究題目、直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2025年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式6）
8. 今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式7）

なお、同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5. 選考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6. 受賞者数

原則一名

7. 青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8. 受賞講演

青藍会総会開催日当日、受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先 青藍会事務局 TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

第42回青藍会・医学科講演会を開催

第42回青藍会・医学科講演会を開催して

蔵本祭学術講演委員会委員長

新 佳 奈 (医学科3年)

令和7年10月23日（木）に第42回青藍会・医学科講演会を開催いたしました。今年度は蔵本祭実行委員の選考が難航し、一時期は蔵本祭の開催も危ぶまれていましたが、例年通り、講演会を実施できたことを大変うれしく思います。

今年度は産婦人科医であり、漫画家でもある茨木保先生をお呼びし、「医学を描く～Medical cartoon よもやま話～」という演題でご講演していただきました。茨木先生はいばらきレディースクリニックの院長として、産婦人科医学に携わりながら、漫画家としても活動しておられます。他にもヒットドラマの監修など幅広い分野でご活躍されている先生であり、医療と漫画をテーマにユーモアを交えてお話ししてくださいました。

先生からは医療漫画にまつわる様々な話を伺いましたが、特に印象に残ったのは一昔前の医学生の方々は、ほとんどイラストのない教科書で学んでいたということです。日々、医学生として勉強する中で、教科書にあるイラストを意識して見ることはほとんどありませんでしたが、先生の話を聞いた後に改めて見返してみると、その精密さと分かりやすさに深く感銘を受けました。2年次の解剖実習でも、班員とともに色付きのイラストが載った解剖書を毎日覗き込みながら、実習を行っていたことを思い出し、医学と漫画は全く異なる分野だと考えていたものの、実は密接に関わっているのだと実感しました。

また、講演会では医学漫画を描いたり、医療ドラマの監修を行ったりする際のご苦労話についてもお話ししてくださいました。リアリティーを重視すると物語の面白みが損なわれ、一方ではファンタジー要素を取り込みすぎると現実味がなくなるなど、近年のクリエイターは、作品そのものに関わるだけでなく、その作品の読者や視聴者の受け取り方まで考慮する必要があるとのお話から、創作の楽しさと同時に、その奥深さや難しさを感じました。

講演会を通して先生が講演会で何度かおっしゃっていました、「ええ加減」という言葉が心に残っています。



す。学生である私たちは、日常の中で正解を求められる場面が多くあります。いつのまにか試験だけでなく、ちょっとした質問や会話にも正解を求めすぎてしまい、失敗をするよりは分からぬふりをしたり、黙り込んでしまったりすることもたびたびです。先生のおっしゃっていた、「ええ加減」には、おざなりであるという意味だけでなく、適度に、ほどよくという意味も含まれています。正解に固執して萎縮するのではなく、「ええ加減」に間違いも許容することで、物事の楽しさや良さがみえ、学びが増えてくるのではないかと思います。

講演会当日は医歯薬学部の多くの学生や教職員の皆様にお越しいただき、非常に興味深く楽しい時間を過ごしていただけたかと思います。私事ではありますが、急遽学術講演実行委員長を務めることになり、青藍会・医学科講演会と蔵本祭の開催に至るまで、不安を感じることも多々ありました。しかし皆様のご協力のおかげで両行事とも無事に終えることができました。最後にはなりましたが、今回の講演会にご尽力いただきました青藍会事務局の皆様、先生方、職員の皆様に心より感謝申し上げます。そしてご多忙の中お越しください、貴重なご講演をしてくださいました茨木保先生に深く御礼申し上げます。

茨木保先生のご講演を拝聴して

蔵本祭学術講演委員会副委員長

坂 本 真璃紗 (医学科3年)

産婦人科医でありながらイラストレーター、医療ドラマの監修など幅広く活動されている茨木保先生のご講演を聞かせていただきました。茨木先生は手

第42回青藍会・医学科講演会を開催



塚治虫作「火の鳥」に衝撃を受け、漫画を描くことを志されたそうです。奈良県立医科大学卒業後、すぐプロデビューを果たし、デビュー作である「遠い手紙」はヤングジャンプ手塚治虫追悼号に掲載され、そこから産婦人科医として研究活動・臨床活動も行われながら執筆活動を続けてこられました。

茨木先生にとって漫画とは、「普段は縁がなかつた様々な知識と出会う機会を作り出す」ものだといいます。先生は医学に関する著書も作成されており、講演で紹介していただいた「ビジュアルノート」は漫画ではないものの、まさにその言葉を体現した作品であると思いました。それは特徴のあるイラストで疾患が表現されており、ただ文字で学ぶよりも印象に残りやすく、知識の定着に役立つ内容でした。先生は「疾患を誇張しすぎるのはよくないが、無難だと頭に残らない」とおっしゃり、その“ギリギリ”的表現を狙って制作されているそうです。し

かし、先生のもとには賛否両論の意見が届くそうで、時には先生が意図していない表現に対して「無責任だ」などといった声も寄せられることがあるそうです。そんなことがあっても先生はいつも「ええかげん」という考え方で創作されているそうです。ここで言う「ええかげん」とは、「適当・投げやり」という意味ではなく、「いい塩梅・ちょうど良い」という意味で、先生は、「作品がより印象的になるなら、演出上の誇張も必要だ」とおっしゃっていました。その言葉から、先生が常に読者への伝わり方と作品としての魅力の“ちょうど良い”バランスを追求されていることが伝わってきました。

講演後の質疑応答で「患者さんと接する時、これだけは譲れないという点はありますか?」という質問に対し、先生は「譲れないところがあるようでないのが私です」と仰っていました。患者さんと話す中で一人一人の性格や考え方を見抜き、その患者さんが最も安心するような声かけをされるそうです。私も将来、ただ患者さんに治療を施すことを考えるだけでなく、それぞれの患者さんが何を不安に思い、何を望んでいるかを理解し、寄り添える医師になりたいと強く感じました。

最後になりますが、今回の講演に尽力していただいた職員の皆様、先生方、青藍会事務局の皆様に深く感謝申し上げます。そして、ご多忙の中ご講演をしてくださった茨木保先生に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



青藍会の助成活動

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
大 藤 純 (医学部43期)

青藍会の皆様には、日頃多くの研修医の受け入れやご指導頂き、また卒後臨床研修センターにご支援を賜り、敬意と共にお礼を申し上げます。

卒後臨床研修センター長として運営に携わるようになり、およそ1年半が経過いたしました。徳島大学の初期研修プログラムでは、大学病院ならではの高度医療を体験できるほか、県内外の研修病院や地域の診療所と連携し、初期研修に必要な症候や経験すべき症例に応じた研修施設を自由に選択できる柔軟性があります。また、卒後センタースタッフによる研修医一人一人の研修スケジュールや進捗状況、体調面への配慮など、きめ細かい情報共有がなされており、非常に恵まれた環境となっています。徳島大学病院の研修医は、県内協力施設の先生方のご指導を賜りながら充実した研修ができており、スタッフ一同誇りに思っております。

さて、本年度も研修医マッチングが開始されました。中間報告ではありますが、県内医療機関のマッチ者は平年並みで推移している印象です。全国の研修病院の募集定員と研修医応募者数（マッチ者数）に解離があり、依然として都市圏への研修医偏在に対応できていないのが現状と思われます。正確な応募見込み者数が把握できているのであれば、募集定員と応募者数を同数とすれば、地域の研修病院が過大な広報合戦に無駄な経費や労力を割く必要がなくなると考えている方も多いと思います。様々な問題はあると思いますが、検討いただきたいところです。また、処遇面においても、超過勤務手当や特殊な状況への補助を除いて報酬は全国一律にすることも検討してよいのではと思います。研修医獲得に向けて、各研修病院が研修内容に工夫を凝らすことは非常に重要なことではありますが、複雑化・高度化した初期研修内容に追従できない医療機関が高い報酬で研修医の獲得に動く姿勢は褒められたものではありません。制度自体の大幅な見直しが必要な時期に来ていると感じます。

ただ、都会志向が強いのは今に始まったことではなく、その傾向そのものに歯止めをかけることは困難といえます。徳島県や徳島大学病院として、立派な研修プログラムを作り、常に研修医ファーストの姿勢を崩さず、立派な医療人を育成することに何ら変わりはありません。地域にとって必要な医師数を把握して現実的な目標を設定すること、初期研修医を集めただけではなく、徳島県全体で育てる体制が重要であり、専門研修以降の生涯のキャリア形成の場となるよう協力できればと思います。来年度も徳島県で初期臨床研修医として活躍してくれる医師が増えることを期待しております。

当センターでは、「徳島で、やろう！」をスローガンに、徳島県全体で医師を育てる ALL 徳島での研修を推進し、県内の若手医師育成と医療の質向上に寄与できるよう取り組んでおります。青藍会の皆様方には卒後臨床研修へのご理解と共に、ご指導・ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願ひ申し上げます。



2026プログラムパンフレット

書籍紹介



このコーナーでは、正会員、名誉会員及び学内関係者の著書を紹介することとしています。専門家向けの書籍および一般向けの書籍を紹介していきたいと考えています。自薦、他薦どちらでも結構です。青藍会事務局までお送り下さい。なお、掲載については広報委員会にご一任下さい。

※

悩みぬいた青春期の私を励ましてくれた珠玉の名言集 「思春期・青年期 悩みの特効薬」

(発売元 星雲社 2025年3月7日発行)

著者 谷 憲治 (医学部28期)



私は、長らく大学で勤務している間、ぜひ執筆してみたい本がありました。しかし、大学に在籍している間は、とにかく医学研究に力を注ぎそれを英語論文として発表しなければならないという責務があったため、その執筆は果たせずにいました。2023年3月に徳島大学を定年退職して、そういういた任務から解放されて2年が過ぎた今年、やっとその願いをかなえることができました。執筆したかった本は、「思春期・青年期 悩みの特効薬」というタイトルで発行することができました。高校生時代の日記に記した自分自身のその時期特有の精神的な悩みを紹介するとともに、その悩みを和らげようと読みあさった書物から教わった金言たちを一冊の本にまとめました。現代のインターネットとブログの時代においては、日記は他人に読んでもらう前提で書いている人が多いのではないでしょうか。読んでもらうことを前提にして書くとなるとその内容にそれなりの意識が働くはずです。しかし、若かりし頃の私の日記には、人に読んでもらうという意識はみじんもなかったため、その時の気持ちをそのまま文章にしています。

今回、本棚の奥にしまわっていた自分の日記や金言集を人目にさらそうと思い立ったのには二つの理由がありました。一つは自分の子孫たちに、青春期に自分自身をこういう目で見つめていた先祖がいたという証を残しておきたかったということです。もう一つは、読んでくれた読者から「私も同じ悩みを持っていた」と共感が得られるのか、あるいは自分の青春期の悩みは自分に特有なものだったのかを知りたいという願いがあったからです。発行して3ヶ月を過ぎると、この本がAmazonなどとともに紀伊国屋や平文書店などにも並べられるようになりました。読んでくれた知人からは「日頃の谷先生の言葉の背景にはこういう人生があったんですね」や、「こんな若い頃にこんなに深く自分自身を見つめていたなんて驚きです」とか、「思春期になって口をきいてくれなくなった孫の気持ちを知りたくて読んでみました」などのコメントをいただいているです。

この本を執筆し、発行してみて一般書を書くことの難しさと喜びを知ることができました。これまで書いてきた呼吸器病学、リウマチ病学などに関する医学書は対象となる読者が医師に限定されています。それに対して、一般書は読者の顔がなかなか見えてこないという難しさがあります。しかし、一冊の紙の本を自分で仕上げていく喜びは想像以上に大きいものがありました。この本のカバー表紙には私が撮影した写真を採用してもらいましたが、本の内容にマッチしているのではないかと自画自賛しております。興味を持っていただいた方にはぜひお読みいただき、感想をお送りいただければこの上ない幸せです。

徳島大学の動き

徳島大学医学部創立80周年記念事業報告

「青藍講堂」改修および医学部「コモンエリア」の整備について

前徳島大学医学部長
呼吸器・膠原病内科学分野教授
西 岡 安 彦 (医学部34期)

青藍会の先生方におかれましては益々ご健勝のことと拝察申し上げます。

この度ご依頼いただきましたので、令和7年3月に完成しました「青藍講堂」の改修および医学部「コモンエリア」の整備について報告させていただきます。いずれも医学部80周年記念事業により整備が進められていた施設です。

「青藍講堂」は、老朽化により使用できなくなる前まで徳島大学医学部の象徴的講堂として主に医学科5・6年生の講義に使用されていました。医学部学生及び教職員に親しみを持って長く使われてきた「青藍講堂」ですが、私も含めてその歴史をご存知の先生方は少ないかもしれません。この機会に「青藍講堂」の歴史を調べてみました。「青藍講堂」の名称を持つ講堂が生まれたのは平成17年1月で、当時老朽化により取り壊し予定となっていた第一臨床講堂を、青藍会からのご寄付により整備し、「青藍講堂」と命名したのが始まりのようです（医学部だより第7号より）。その時から20年の歳月を経て、再び新しい「青藍講堂」として生まれ変わりました。



新しい青藍講堂（改修後）

構造体は実に60年前に建築された建物のため、現在の規格に合わない部分もありましたが、とてもお洒落にリニューアルしていただいたと感じています。徳島大学医学部が誇る講堂の一つが、これから多くの学生の心に残る学修の場として続いてくことを青藍会員の一人として、徳島大学医学部教員の一人として大変嬉しく思います。

一方、医学部「コモンエリア」は医学部基礎A棟1階の医学部正面玄関を入ってすぐ左のエリア（東寄り）に完成しました。この「コモンエリア」は医学部80周年記念事業の目玉の一つとして取り組



完成記念式典（令和7年4月2日）



医学部コモンエリア

んできた事業になります。発端は、「医学部には学生が講義の合間、実習の合間に時間を潰す便利な場所がない！」というある先生からのご指摘です。確かに医学部には学生や教職員がそういった感覚で集う共同スペースがないと感じました。そこで私の頭の中では「スター・バックス以上の空間を！」を目標に整備を進めてきました。全体にシックな色調で、静かさと清潔を感じ、そして便利な（電源も取れる）要素も加味した快適な空間になりました。ちょっとリラックスして勉強や研究を進める、そのエネルギーを充電するために使っていただければ幸いです。そして、デジタルサイネージを設けて様々な医学部

の学生や教員のホットなニュースを見ることもできる場にもなっています。ぜひ医学部のニュースを皆さんで共有して楽しんでいただけた場としても活用いただければ幸いです。

一点だけ残る課題は、「相応しい名称」です。医歯薬学共同利用棟1階にある「すだちホール」と対になるような象徴的な親しみやすい名称があればと考えています。

末筆になりますが、ご寄付をいただきました青藍会の先生方に改めて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

徳島大学医歯薬学共創プラザの完成について

— 医・歯・薬がつながる共創の拠点 —

徳島大学大学院医歯薬学研究部長
赤 池 雅 史（医学部31期）

蔵本キャンパスには、医学・歯学・薬学・栄養学・保健学にまたがる1大学院研究部、3学部6学科・5大学院研究科、先端酵素学研究所、そして徳島大学病院が集結しており、医療系全領域にわたる教育・研究・診療体制が一つのキャンパスに集約されています。この特色を最大限に生かし、新たに整備されたのが「医歯薬学共創プラザ」です。本施設は文部科学省「令和4・5年度施設整備費補助金事業」により歯学部校舎西側を全面改修して整備されたもので、総面積8,626m²、総事業費約18億円を投じて完成しました。徳島大学第4期中期計画に掲げる「快適なキャンパス環境の形成」および「イノベーション・コモンズを形成する共創の場の創出」を具現化するものであり、教育・研究・国際交流を一体的に推進する“ソフトとハードが融合した共創拠点”として位置づけられています。

本施設には総面積を従来の592m²から1627m²へと大幅に拡充した新しいスキルス・ラボが設けられ、1階に基本的診療技能を学ぶ各種シミュレータ、2階に腹腔鏡手術、脳血管・冠動脈インターベンション、超音波検査、ECMO、歯科治療、バーチャルリアリティ実習などに対応した高機能シミュレータを設置

し、3階には在宅ケア用模擬住宅、模擬病室、模擬ICUを備えています。高機能シミュレータをはじめとするこれらの整備には、濱本恒男先生（医学部第23期）からの徳島大学70周年記念事業基金へのご寄附を活用しており、その功績を讃えて1階玄関に大塚オーミ陶業製の陶板による顕彰碑を設置するとともに、2階を「濱本恒男記念メディカルトレーニング・ステーション」と命名いたしました。また、1階西側には、医師・歯科医師を対象に、先進的な手術手技研修や新規手技開発を対象で行うクリニカル・アナトミーラボを拡充し、凍結遺体および低濃度ホルマリン固定遺体の双方に対応可能としました。石井キャンパスのバイオイノベーション研究所には生豚手術トレーニング施設があり、卒前・卒後・リカレント教育に対応する全国有数の教育環境が整いました。

2階・4階・5階にはチュートリアル室25室と共通講義室2室を設け、PBLチュートリアル教育、OSCE（客観的臨床能力試験）、各種ワークショップ等に活用しています。4階には国際交流エリアとして国際交流室および研修室を整備しました。6階には177台の端末を有するPCセンターを設置しました。

徳島大学の動き

ここでは統計学・データサイエンス教育や、バーチャルスライドによる組織・病理学実習、CBT (Computer Based Testing) など、ICT を活用した先進的教育が行われています。

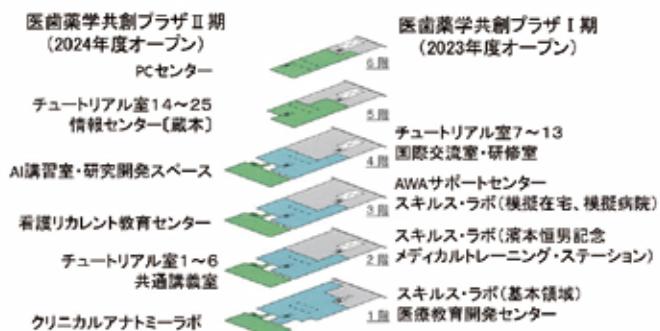
さらに本施設には、スキルス・ラボ管理、医療系専門職連携教育、領域横断型大学院教育を担う「医療教育開発センター」、認定看護師教育課程や看護師生涯教育を推進する「看護リカレント教育センター」、ダイバーシティやワークライフバランス推進の拠点である「AWA サポートセンター」、全学組織の「情報センター」「デザイン型 AI 教育研究センター」

の蔵本拠点など、多様な教育・研究組織が集約されています。

徳島大学医歯薬学共創プラザは、蔵本地区の強みを最大限に活かし、学内外のあらゆるステークホルダーが共に学び、共に創り、未来の医療を切り拓く場として、また、地域産業界や医療機関との連携を深化させる共創の拠点として、地域から世界へと発信してまいります。青藍会の皆様におかれましては、今後とも一層のご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。



医歯薬学共創プラザ正面玄関



医歯薬学共創プラザ施設概要



濱本恒男先生顕彰碑除幕式（令和6年10月3日）
(左から) 赤池雅史医歯薬学研究部長（医学部第31期）、濱本恒男先生（医学部第23期）、
河村保彦学長、西岡安彦医学部長（医学部第34期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介



徳島大学大学院医歯薬学研究部
実践地域診療・医科学分野特任教授
河 野 豊 (かわの ゆたか)

略歴

平成10年4月	札幌医科大学内科学第四講座 診療医
平成14年4月	札幌中央病院 内科医師
平成15年5月	北海道消化器科病院 内科医師
平成16年11月	札幌医科大学第4内科 診療医
平成19年12月	札幌医科大学臨床検査医学講座 助教
平成21年1月	札幌医科大学第4内科 助教
平成22年1月	Dana-Farber Cancer Institute, Department of Medical Oncology, Post-doctoral fellow
平成24年1月	札幌医科大学第4内科 診療医
平成24年4月	札幌医科大学第4内科 助教
平成28年4月	札幌医科大学 感染制御・臨床検査医学講座助教
平成30年4月	北海道医療大学 予防医療科学センター 講師
令和2年1月	北海道医療大学 予防医療科学センター 准教授
令和4年4月	徳島大学医歯薬学研究部 実践地域診療・医科学 消化器内科分野 特任准教授
令和6年11月	徳島大学医歯薬学研究部 実践地域診療・医科学 消化器内科分野 特任教授 (現在に至る)

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野
特任教授 河 野 豊

令和6年11月1日付で医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野特任教授を拝命いたしました河野豊と申します。この場をお借りして青藍会会員の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成10年に札幌医科大学を卒業し、同大学院にて博士号を取得しました。その後、平成22年から2年間、米国ボストンのダナファーバーがん研究所にて、制御性T細胞のテロメラーゼ活性やペプチドを用いたアボトーシスのプロファイリングに関する研究に従事しました。令和4年からは徳島大学と阿南医療センターにおいて、消化器疾患や肝疾患の診療、ならびに基礎研究に取り組んでまいりました。現在、全国的な医師不足に伴い、基礎研究に携わる医師も減少傾向にあります。今後は、基礎研究の魅力を若手医師に伝え、国際的に活躍できる研究者を育成するとともに、肝臓専門医が不足している県南地域の住民の皆さまの健康維持にも尽力してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に、青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。



徳島大学大学院医歯薬学研究部
ウイメンズヘルス支援学分野教授
加 地 剛 (かじ たかし)

略歴

平成7年3月 徳島大学医学部医学科卒業
平成7年4月 徳島大学医学部附属病院
平成8年4月 徳島県立中央病院
平成9年4月 国立高知病院産婦人科
平成11年4月 徳島県立海部病院産婦人科
平成13年4月 大阪府立母子保健総合医療センター産科
平成15年4月 徳島県立中央病院産婦人科
平成16年4月 徳島大学医学部・歯学部附属病院産科婦人科医員
平成19年4月 徳島大学医学部・歯学部附属病院産科婦人科診療助教
平成20年7月 徳島大学医学部・歯学部附属病院産科婦人科助教
平成25年7月 徳島大学病院産科婦人科 講師
平成27年10月 Baylor College of Medicine Research Scholar
令和2年4月 徳島大学病院周産母子センター准教授 周産母子センター長
令和3年12月 徳島大学病院病院教授
令和7年4月 徳島大学大学院医歯薬学研究部ウイメンズヘルス支援学分野
(現在に至る)

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部ウイメンズヘルス支援学分野
教授 加 地 剛 (医学部41期)

令和7年4月1日付で、徳島大学大学院医歯薬学研究部ウイメンズヘルス支援学分野の教授を拝命いたしました。青藍会の諸先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成7年に徳島大学医学部医学科を卒業し、徳島大学産科婦人科学教室に入局いたしました。その後、徳島大学および関連施設にて研鑽を積み、産婦人科専門医を取得後は、主として周産期医学の診療・研究・教育に従事してまいりました。なかでも胎児超音波診断を中心とした胎児医学を専門としております。

今後は、これまでの経験を活かし、保健学域における研究・教育および社会活動を通じて、ウイメンズヘルス支援学をより包括的な学問として発展させるべく尽力してまいる所存です。これまでご指導賜りました青藍会の諸先生方に、心より御礼申し上げます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



徳島大学キャンパスライフ健康支援センター
アクセシビリティ支援部門教授
梅 原 英 裕 (うめはら ひでひろ)

略歴

平成18年3月 徳島大学医学部医学科卒業
平成18年4月 徳島県立中央病院卒後臨床研修
平成19年4月 徳島大学病院卒後臨床研修
平成20年4月 徳島大学病院医員（精神科神経科）
平成21年4月 香川県立丸亀病院医師
平成22年4月 独立行政法人国立病院機構 香川小児病院医師
平成24年4月 徳島大学病院特任助教（精神科神経科）
平成29年8月 徳島大学病院助教（精神科神経科）
令和3年4月 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野助教
令和3年11月 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野講師
令和7年4月 徳島大学キャンパスライフ健康支援センターアクセシビリティ支援部門教授
(現在に至る)

アクセシビリティ支援部門教授就任挨拶

徳島大学キャンパスライフ健康支援センター・アクセシビリティ支援部門
教授 梅 原 英 裕 (医学部52期)

このたび、徳島大学キャンパスライフ健康支援センター・アクセシビリティ支援部門の教授を拝命いたしました梅原英裕です。青藍会の皆さんには、日頃より大学と学生への温かいご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

アクセシビリティ支援部門は、障がい学生支援を主たる仕事としておりますが、理念としては、障がいの有無にかかわらず、すべての学生が学びやすい環境を整えることを目的としています。合理的配慮や学習支援の仕組みづくりはもちろんのこと、学生同士や教職員との協働を通じて、多様性を尊重し合えるキャンパス文化を育んでいくことも重要な使命と考えております。

私自身はこれまで精神医学や児童思春期医療の研究・臨床に携わってきましたが、その経験を活かし、心身の不調や発達特性を抱える学生への支援を学術的に裏づけ、実際の教育現場に還元していくことを目指しております。また、支援室の活動を大学全体の学修環境改善へつなげることで、より多くの学生が自分の力を最大限に発揮できるよう尽力してまいります。

今後とも、青藍会の皆さんからの温かいご理解とご協力を賜りながら、学生の成長を支え、大学の発展に貢献できますよう努力してまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

留学記

飯田倭久 石田祐也
得津成次郎

タイ・ランパーン病院にて

飯田倭久（医学科4年）

このたび、徳島大学のご支援のもと、2025年7月28日から8月10日までの約2週間、タイ・ランパーン病院の救急科にて実習留学する貴重な機会をいただきました。異なる文化や言語環境の中で、医療の最前線である救急の現場に立ち会えたことは、非常に刺激的で、学びに満ちた経験となりました。今回この留学に応募したのは、「限られた学生生活、日本の医療だけを見て終わるのはもったいない」と感じたからです。学生のうちに海外の医療現場に触ることは、自分の視野を広げ、将来の医療人としての成長に繋がると考えました。なかでも救急科は、年齢や疾患を問わず多様な患者を受け入れる場であり、タイという国の医療体制や緊急対応をリアルに理解するのに最適だと考え、参加を決意しました。

実習中は、ランパーン病院の救急外来にて、初期診療、外傷対応、集中治療的処置などを見学・補助しながら、多くの症例に触れることができました。現場では主にタイ語が使われていましたが、先生方や医学生の皆さんのが英語で丁寧に補足説明をしてくださいり、病態や治療方針の理解に大いに助けとなりました。特に印象に残ったのは、タイの医学生が非常に積極的に実臨床に関わっていたことです。4年生から身体診察、エコー、注射、縫合などの基本手技を上級生の指導のもとで実践しており、6年生になると診断から治療方針の立案、指導医への報告、カルテの記入まで指導医の責任で行っていました。日本の医学生と比べて、現場への関与が非常に深く、学びの姿勢にも強い刺激を受けました。当初は、英語でのコミュニケーションに不安がありました。先生の指示が聞き取れなかったり、質

問の意図を理解できず悔しい思いをする場面もありました。しかし、「もう一度お願ひします」「やってみたい」と積極的に伝えることを意識するうちに、少しずつ自分が自分の言葉で現場に関われるようになっていきました。英語は完璧でなくても、意欲があれば想いは伝わるということを、身をもって実感しました。さらに、救急科以外にも、救急車に同乗して一次救命の現場を見学したり、放射線科の見学、救急科研修医による勉強会・症例報告会にも参加させていただきました。タイの医療制度や現場の課題、日本との違いを肌で感じることができ、今後のキャリア形成を考える上でも非常に有意義な時間となりました。

生活面では、現地のタイ人医学生と交流する機会に恵まれました。各国の医療事情や将来の夢を語り合うなかで、自分自身の視野も広がり、学びのモチベーションが一層高まりました。休日には、チェンマイや近郊の寺院などを訪れ、タイの豊かな文化や歴史に触れることができ、心身ともにリフレッシュすることができました。今回の留学を通じて、語学力だけでなく、柔軟な姿勢、異文化への理解、積極的な学びの姿勢の大切さを改めて実感しました。日本にいるだけでは得られない気づきが、この2週間には確かにありました。医療という共通言語を通じて、国や文化を越えて患者に貢献するという喜びを知ることができたことは、今後の人生において大きな財産になると確信しています。

最後に、貴重な機会をくださった徳島大学の先生方、Thanin先生、ランパーン病院の皆さんに心より感謝申し上げます。この経験を糧に、どのような環境でも柔軟に対応できる医師を目指し、学び続けてまいります。



お世話になった先生方と

サマーセミナー 2025： モンゴルの熱気に触れた4日間

石 田 祐 也 (医学科4年)

2025年8月20日から23日まで徳島大学医学科学生の代表として「モンゴル国立医科大学サマーセミナー」に参加しました。4日間という短い日程でしたが、モンゴル国立医科大学の代表学生とのシンポジウム、関連病院であるモンゴル日本病院の見学、チンギスハーン博物館の見学など、充実したプログラムでした。

2日目の午前には学生シンポジウムに参加し、互いの大学の特徴・大学生活・地域文化について紹介し合いました。私を含む代表学生3名は、事前に何度も打合せを行ってプレゼンテーションを作成しました。徳島大学や徳島県の魅力は何か。どんな情報を伝えれば親しみを覚え、行ってみたいと思ってもらえるか。様々なことを検討する中で、私たち自身も本学や徳島県について考え直す良い機会となりました。モンゴル側の学生のプレゼンテーションもとても魅力的なものであり、彼らの大学生活について深く知ることができました。シンポジウム中の休憩時間にはモンゴルの民族衣装を着させて頂いたり、伝統的なお菓子を頂いたりと、モンゴルを存分に堪能しました。午後はウランバートル市内の観光をしました。チンギスハーン博物館では、数多くの素晴らしい展示を通して、モンゴルの歴史についての理解を深めることができました。「現代のモンゴル」のコーナーでは白鵬闘闘に触れる展示もあり、日本とモンゴルの繋がりを感じました。

3日目にはモンゴル日本病院の見学をさせて頂きました。病理診断科・放射線科・手術室・教育施設など、病院設備やシステムについてスタッフの方々が丁寧に説明してくださいました。日本の総合病院と遜色ない水準の設備があり、シミュレーターによる腹腔鏡手術体験もしました。病院見学後は病院スタッフや代表学生の人達と、郊外にある Mongolia Culture Park を訪れました。乗馬体験や屋外での迫力あ

る演劇、モンゴル相撲「ブフ」の試合や伝統音楽を鑑賞しました。

さて、今回の訪問で特に印象的だったことは「モンゴルの経済発展の凄まじさ」と「街にあふれる若い人たちの活気」でした。私は10年以上前に、モンゴルを何度か訪問していました。最後に訪れたのは13年ほど前でしたが、その際のウランバートルとは比べ物にならない程の大都市となっていました。モンゴルに降り立った瞬間から、新設された現代的な空港に驚かされました。ウランバートル中心部では無数の高層ビルやショッピングモールが作られており、新たなビルが至る所で建設されていました。そこには13年前のウランバートルの面影はほぼなく、見知らぬ場所に来た気持ちになりました（浦島太郎もこんな気持ちだったのかと思いました）。また街中には若い人たちが多く、夜遅くまで活気に溢っていました。モンゴル日本病院でも、スタッフの方々の若さが印象的でした。今まさに広がり続ける街とその社会を担う人々の熱気は、モンゴルのさらなる発展を期待させるものでした。

たった4日間の訪問でしたが、“モンゴル濃縮100%”と感じさせるほど濃厚なプログラムでした。しかし、もちろん訪れたい・訪れるべきと思う場所はまだまだあります。またプログラムとしての訪問を終えて、今度は「モンゴルに住む人たちの日常についてもっと知りたい」と思うようになりました。このサマーセミナーを通じて、医療を学ぶ者としての視野が大きく広がっただけでなく、一人の人間としても成長できたように思います。この素晴らしい機会を与えてくださったすべての方々に、深く感謝いたします。



Mongolia Culture Parkでの集合写真

2ヶ月間の留学が教えてくれた 学びと感謝

得 津 成次郎 (医学科 4 年)

私はアメリカ・テキサス州ヒューストンにあるUTHealth主催のSummer Research Programに参加し、消化器内科の研究室で2ヶ月間、研究に従事しました。将来は海外でのキャリアも視野に入れており、学生のうちにその環境や文化を体験しておきたいという思いから応募しました。研究活動に取り組むだけでなく、生活や人との交流を通じて多くの学びを得られ、この留学は私にとって大きな転機となりました。

まず印象的だったのは「多様性」です。ヒューストンは多国籍の人々が共存する都市で、研究室でも半数近くが他国出身者でした。日常的に異なる文化背景を持つ人々と接する中で、相手の立場に配慮した言動の大切さを実感しました。ある会話で性差にに関する不用意な言及をした際、強い批判を受け、日本以上に多様性への意識が高いと感じました。最初は戸惑いましたが、この経験は将来グローバルな環境で医療に携わる上で、異なる価値観を尊重する姿勢が不可欠であることを教えてくれました。一方で、私の関わった人は基本的に皆親切で、経験の浅い私に丁寧に接してくれ、その温かさに助けられました。文化的な違いを学びながら、人の温かさを深く感じることができました。

次に強く印象に残ったのは「格差」です。通学路の高架下には多くのホームレスが暮らしている一方で、少し離れると高級住宅街が広がっており、格差の大きさに衝撃を受けました。医療が必要であっても高額な医療費のため治療を受けられない人々がいる現実を知り、胸が痛みました。その一方で、日本の国民皆保険制度や高額療養費制度がいかに社会の安全網として機能しているかを再認識しました。また、医学部進学について、医師家庭の子どもが有利である一方、そうでない家庭の子どもは苦労が多い

いことを同世代から聞き、日本の入試制度の公平さを実感しました。格差を直視した体験は、医療者として社会にどう貢献するべきかを考える大きな契機となりました。

生活面でも初めての海外に不安はありました、現地で多くの日本人の先生方に支えられ、病院見学や食事に誘っていただき、助言や励ましをいただきました。滞在先では留学生や研究者と共同生活を送り、安心できる環境で交流を深めることができました。休日には野外劇場でダンスや音楽を楽しみ、美術館を訪れるなど文化的にも充実した時間を過ごしました。食事においても多様な文化に対応する飲食店が揃っており、不自由はありませんでした。

この2ヶ月の経験を通じて、私は医学生としてだけでなく一人の人間としても成長できたと感じています。文化の多様性に学び、社会的格差を目の当たりにし、日本の制度の価値を再認識したことは、今後の人生における大きな指針となりました。そして何より、支えてくださった先生方や研究室の仲間、現地の日本人の方々への感謝の思いでいっぱいです。この経験を与えてくださった徳島大学にも深く感謝し、将来は必ず徳島に還元できるよう努力を続けたいと考えています。



ヒューストンで働かれる麻酔科医の先生の勤務病院に
案内していただいた時に撮っていただいた1枚

第77回西日本医科学生 総合体育大会の結果

○剣道部	男子団体 優勝	○陸上競技部	女子個人 第1位
○剣道部	男子個人 優勝	○水上競技部	女子個人 第2位
○ゴルフ部	女子個人 優勝	○ゴルフ部	女子団体 第3位

第77回西日本医科学生 総合体育大会 剣道部 優勝

徳島大学医歯薬学部剣道部主将
橋 本 青 空 (医学科2年)

令和7年8月から剣道部の主将を務めさせていただきます、橋本青空と申します。第77回西日本医科学生総合体育大会剣道競技は佐賀県鳥栖市で開催され、徳島大学医歯薬学部剣道部からは4名の選手が出場しました。以下にその結果をご報告させていただきます。

男子個人 優勝 橋本 青空 (医学科2年)
(175選手中)

準優勝 片岡 俊人 (医学科6年)

男子団体 優勝 徳島大学 (36大学中)
選手以下4名
片岡 俊人 (医学科6年)
多田 圭祐 (医学科5年)
仁木島史弥 (医学科2年)
橋本 青空 (医学科2年)

今年の西医体は令和7年8月16, 17日の2日間で開催され、前日に個人戦、2日目に団体戦という形で行われました。今年の夏は非常に暑い日が続きましたが、西医体のため我々剣道部は非常に厳しい練習を死に物狂いで耐え抜きました。その結果西医体の個人は優勝、準優勝、団体戦は徳島大学初の優勝を果たすことができました。団体戦は補欠選手まで含めて最大7名登録できる5人制で行われます。その中で徳島大学は1人ハンデを負うような形となります、チーム一同力を振り絞り前代未聞の4人で



※※ 第77回西日本医科学生総合体育大会の結果

優勝を勝ち取ることができました。それぞれの選手がベストを尽くし、自分自身に課せられた役割を果たすことができました。そしてなにより日頃の練習の成果と支えてくださった先生方やマネージャーたちのおかげでこのような良い成績で終えることができたと部員一同確信しております。この場をお借りして日頃の感謝を伝えさせていただきます。

追記でよろしければ報告させてください。同日令和7年8月16日に佐賀県鳥栖市で行われた第28回西日本コメディカル学生剣道大会での結果です。

男子団体 第3位 徳島大学 (11大学中)

選手以下5名

楠 雷斗 (薬学科6年)
矢田 浩晃 (薬学科6年)
小川 春陽 (保健学科4年)
上田 朔也 (保健学科3年)
相良 謙 (薬学科2年)

さて、西医体は無事終えることができましたがこれはゴールではありません。今大会でどれだけ厳しい状況でも、必死に努力し気持ちさえ負けていなければ、目標を達成できることを感じました。我々徳島大学医歯薬学部剣道部はこれから医療系の大会だけに限らず、すべての大会の優勝を目指して日々の稽古に励みます。最後になりますが、この場で結果報告を行う機会を与えていただいたことを深く感謝申し上げます。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

第77回西日本医科学生総合体育大会を終えて

徳島大学医学部ゴルフ部主将

吉田 怜央 (医学科4年)

平素より、ゴルフ部の活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。日々、充実した環境のもとで練習に取り組めますのは、ゴルフ部部長・橋本一郎教授をはじめ、長年ご指導を賜っております佃一生監督、並びに青藍会の先生方、さらにはOB・OGの諸先生方からのご支援の賜物と存じます。ここに、改めて深く感謝申し上げます。

さて、このたびの第77回西日本医科学生総合体育大会ゴルフ競技は、鹿児島県・高牧カントリークラ

ブにおいて、令和7年8月19日および20日に開催されました。本大会におけるゴルフ部の戦績をご報告いたします。

第77回西日本医科学生総合体育大会ゴルフ競技 結果
団体の部：第3位 (20大学中)

個人の部：優勝 森田 彩夏 (84名中)

今回の成果は、ひとえに日頃からの温かいご支援の賜物であり、関係各位のお力添えに心より御礼申し上げます。今後も、10月に開催される全医体をはじめ、各大会においてより良い成績を収められるよう、部員一同一層の努力を重ねてまいります。引き続きご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

森田 彩夏 (医学科4年)

今年度の西医体では、団体戦で第3位、個人戦では三年連続優勝を達成することができました。三連覇を達成できたのは、日々の練習と仲間の支えがあってこそだと実感しています。特に団体戦では、メンバー全員が全力を尽くした結果として第3位に入賞でき、大変うれしく思います。この成果に満足することなく、これからも技術と精神を磨き続け、さらなる高みを目指して努力してまいります。



西医体ゴルフ女子団体戦メンバー
左から 4年 大久保茉里奈 4年 森田彩夏
3年 竹林瑚乃香 2年 竹内百佳

第77回西日本医科学生総合体育大会の結果

大久保 茉里奈（医学科4年）

この度、初めて西医体に出場させていただき、団体3位という結果を残すことができました。自分自身にとっては初めての西医体で、大きな緊張の中でのプレーとなり悔いの残るスコアではありましたが、他のメンバーと励まし合いながら最後まで全力でプレーすることができ、このような結果につながったことを大変嬉しく思います。

今後はこの経験を糧に、より一層チームに貢献できるよう、日々練習に励みたいと思います。ありがとうございました。

竹林 瑠乃香（医学科3年）

今回、西医体に初めて出場させていただき、団体3位という結果を残すことができました。試合では思うようにいかず、悔しい場面も多々ありましたが、仲間と励まし合いながら最後まで集中を切らさずにプレーすることができ、一生の思い出となりました。

このような貴重な経験を得られたのは、日頃から応援し、ご支援くださる先生方、監督、そしてOB・OGの先輩方のおかげです。心より感謝申し上げます。今後は今回の経験を糧に、より一層成長できるよう精進してまいります。

竹内 百佳（医学科2年）

今回は鹿児島で西医体に出場させていただき、団体3位という結果を出させて嬉しく思います。私は毎大会で緊張してしまい、練習ラウンドよりも本戦で叩いてしまいます。しかし、先輩方が支えて下さり、温かい言葉をかけてくださるので頑張ることが出来ました。

今後、よりいいスコアでまわり団体優勝を目指して

練習に取り組みたいと考えています。今回も大会に出させて下さり、ありがとうございました。

第77回西日本医科学生総合体育大会を終えて

徳島大学医学部陸上競技部主将

佐藤 聖（医科栄養学科3年）

皆様、はじめまして。徳島大学蔵本陸上競技部主将の佐藤聖と申します。第77回西日本医科学生総合体育大会は鹿児島県白波スタジアムで開催され、蔵本陸上競技部からは3名の選手が出場しました。以下にその結果をご報告させていただきます。

- ・女子100m 2位 松岡久碧子（医学科6年）
- ・女子200m 1位 松岡久碧子
- ・女子400m 1位 松岡久碧子
- ・男子走幅跳 4位 山本 大心（医学科4年）
- ・男子5000m 10位 望月 歩（医学科5年）

今年度の西医体陸上競技部門は、気温・湿度ともに高く一時雨が降った中、2日間の日程で行われました。そのような厳しい気温環境の中、多くの選手がベストを尽くせたこと、そして大きな怪我もなく大会を終えることができたことを、主将として大変うれしく思います。また、今大会では、出場したメンバーが入賞を達成することができただけなく、団体戦においても出場人数の少ない中、女子トラック総合4位という成績を残すことができました。これまで取り組んできた練習は間違っていなかったと安堵と



左：松岡久碧子、中央：出場選手集合写真、右：山本大心

❖ 第77回西日本医科学学生総合体育大会の結果

喜びを感じるところが多くありました。しかしその一方で団体戦において1位を取れなかつた悔しさも痛烈に感じました。2日間の緊張感に満ちた試合を通して、これからも自己ベスト更新していくためにはそれ何かすべきか、その答えが明確になりました。今後も懸命に練習に励み、来年こそは悲願であるトラック総合優勝を達成したいと思います。

さて、西医体は終了しましたが、関西医歯薬、中四国個人戦と我々の陸上生活は続いていきます。西医体を通して感じた喜びや悔しさを糧に、これからも歩みを止めず一歩一歩成長してまいりたいと思います。

今後とも変わらぬご支援・ご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。最後になりますが、このような結果報告の機会を設けていただいたこと、深く感謝いたします。

第77回西医体を終えて

徳島大学医学部水上競技部

吉 田 恵（医学科2年）

第77回西日本医科学学生総合体育大会の水泳の部は、鹿児島県鹿児島市の鴨池公園水泳プールにて、8月8日から10日にかけて、鹿児島大学の運営のもと開

催されました。以下、今大会で入賞した選手を報告させていただきます。

女子200m個人メドレー 2位 吉田 恵（2年）

男子100m平泳ぎ 4位 富岡 優（4年）

今回の大会は天候不良によって開催そのものが危ぶまれるという事態になりましたが、運営にあたっていた鹿児島大学のみなさんをはじめとした様々な方のご尽力により開催することができました。運営にあたっていただいた方々には感謝の気持ちでいっぱいです。競技に関してはプログラム変更がなされた部分もありましたが、その中でも各自が揺らぐことなく最善を尽くして競技に臨むことができました。これは日頃の練習に加えて、この西医体に備えて自主練習に取り組んでいたことによる自信が支えとなった結果だと思います。去年よりも総合順位を落としてしまいましたが、選手の大半が自己ベストを更新していたことから各自の成長を実感すると同時に周りの選手のレベルが去年よりも上がっていることを痛感しました。私自身としては去年よりも1つ順位を落としてしまい、納得のいく結果というわけではなかったので、これからより一層練習に励みたいと思います。来年度、富山で行われる西医体では各自が今年の西医体以上の記録を残し、総合順位でも今年以上の結果を残して水泳部を盛り上げていきたいです。今後とも応援よろしくお願ひいたします。



学生だより

本篇は、青藍会学生広報委員の安倍隆之介さん、加藤碧さんに企画していただきました。

折り返しに向けて

青藍会学生広報委員

安倍 隆之介（医学科3年）

この度、学生だよりの企画を担当させていただきます、医学科3年の安倍隆之介です。今回は私たちの普段の大学での生活をお届けできたらと考えています。

1・2年生での基礎医学や解剖実習を経て、3年生になってからは研究室配属が始まりました。研究室配属は学生それぞれが自分たちの興味のある分野にて半年間の研究を行うというものです。私自身は耳鼻咽喉科・頭頸部外科という分野に配属され、自身の研究を行っています。また先生方とのやり取りを通じて、これまでではるか先のように感じていた医師という職業をいよいよ身近に迫ってきているという実感と共に、臨床への興味を深めています。午前中は朝早くから薬理学や病理学などの講義があり、午後は研究室と毎日忙しい日々ですが、医学部の折り返しに近づいていることもあります、1・2年生の時よりも勉学に身が入るようになったと感じています。12月からはいよいよ臨床分野の講義も始まります。実際の症例をグループディスカッションを行うことによって推定していくことは今までに学んだ基礎医学の知識が必要不可欠です。そのため基礎医学の復習を行いつつ日々の学習に取り組んでいます。また、今後学年が上がるにつれて病院実習も増えていきます。新しいことを学んでいくことを楽しみにしつつ一歩ずつ学んでいっています。

私たち青藍会学生広報委員は、今後も卒業生の方々に今の徳島大学での様子を深く知っていただけるよう、様々な企画を考えています。ぜひ最後までご覧いただき、楽しんでいただけたら幸いです。

これまでの大学生活を通じて

青藍会学生広報委員

加藤 碧（医学科3年）

この度、学生だよりの企画を担当させていただきました、医学科3年の加藤碧です。学生広報委員として、日々の学びや大学生活の様子を皆さんにお伝えすることに責任を感じつつ、光栄に思っております。

今年度からは研究室に配属され、午前中は講義、午後は研究室での活動といった充実した日々を送っています。研究室の先生には、日頃から温かいご指導をいただき、親身に気遣っていただき感謝の気持ちでいっぱいです。また、去年までと違って授業が朝早く始まるようになり、少し大変に感じることもあります。しかし、多くの先生方から医学的な知識だけでなく、医療に対する姿勢や考え方についてもご指導いただき、自分の将来を見つめ直す貴重な機会となっています。12月からは臨床に関する講義が始まり、実際の医療現場を強く意識した学びが始まることを、今から楽しみにしています。一方で、理解が不十分なまま置いていかれることのないよう、これまで積み重ねてきた基礎医学の知識をしっかりと活かし、毎日の授業に真摯な姿勢で臨みたいと考えています。

大学生活を通じて実感しているのは、自由には常に責任が伴うということです。大学ではそれ以前とは比べ物にならないほど自由な時間が多くなりますが、その時間をどのように過ごし、どのように活かすのかを決められるのは自分自身です。誰かが答えを用意してくれるわけではなく、決断の結果に責任を持つのも自分であることを、日々の学びの中で実感しています。そして、この「自分で選び、自分で責任を取る」という姿勢は、将来医師として判断を迫られる立場に立ったときにも、欠かせない姿勢だと思います。そのためにも、今の学生生活の一つひとつを大切に積み重ね、自分の選択に少しでも自信を持てるよう努力してまいります。

学生だより

最後になりますが、この学生だよりを通じて、在校生や卒業生の皆さんに徳島大学での学生生活の一端をお届けできれば幸いです。今後も、青藍会学生広報委員として情報を発信してまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

活気と個性あふれる医軟テ!!

医学部軟式庭球部 男子主将
吉川和輝(医学科3年)

この会報を読んでいるみなさんこんにちは！今期の医学部軟式庭球部男子主将を務めさせていただけておりまます医学科3年の吉川和輝と申します。

まず初めに、この青藍会会報を制作するにあたってご尽力いただきました方々、並びに日頃より医学部軟式庭球部をご指導、ご支援いただいている皆様方に深い感謝の意を表したいと思います。

活気と個性あふれる医学部軟式庭球部！通称医軟テ！を皆さんによく知ってもらえるよう私たちの活動内容について知ってもらいたいと思います。私たちは主に大学内にあるテニスコートで日々の練習に励んでいます。コートの横を通ると医軟テ特有の「ファイトファイト！」という掛け声が聞こえてきます。この掛け声のおかげで部員の士気が高まり、夏場のしんどい練習時期でも活気あふれる和気あいあいとした雰囲気を出しています。

医軟テは1年を通して様々な大会に出場しています

す。西日本の医学科生が集う西日本医科学学生総合体育大会、通称西医体や関西医歯薬大会をはじめとする公式戦や、他の大学が主幹となって行う練習試合も多くあります。もちろん私たちが主幹となって行う「徳大戦」も毎年7大学を集めて行われています。徳島大学は外部とのつながりが深いのも一つの特徴で、他大学と希望者を募ってテニス合宿をする「テニス会」や他大学の方々をお招きして合同練習なども行っています。その成果もあって大学で初めてラケットを握った子でも団体戦メンバーに抜擢されるほど上達が早いです！

部活だからと言ってずっとテニスをしているというわけでもなく息抜きになる楽しいイベントもあります！その代表例が“紅白戦”!!部員が4チームに分かれて団体戦を行って優勝を決める部内戦なのですが、その醍醐味がコスプレ!!各チームに割り当てられたテーマをもとにコスプレをして、前衛・後衛を入れ替えて男女ペアでします!!毎年ハチャメチャな展開を見ることができ、どのチームが優勝するか最後まで分からぬとても楽しいものとなっています！

医軟テの活動を少し紹介してみましたが私たちの活気は伝わりましたでしょうか？医軟テは他にもスポーツ大会やBBQなど楽しいイベントはもちろん、テニスの技術向上のために先輩・後輩問わず自主練もして活発です！皆さんも日々の生活でストレスが溜まってきたら私たちの練習を見に来てみてはいかがでしょうか？きっと元気を分けてもらえると思います！コートで部員一同お待ちしております!!



「踊る阿呆たち ～医学部たけのこ連～」

たけのこ連 連長
平 良 ひなり（医学科4年）

まず初めに、たけのこ連活動に協力頂きました先輩方やOB・OGの皆様、そして応援していただきました卒業生や学校関係者の皆様にこの場をお借りして感謝の意を表させていただきます。

私が初めて阿波踊りに参加したのは3年生の夏でした。友人から「一緒に出てみない？」と誘われ、特に深く考えることもなく、半ばノリのような気持ちで連に加わりました。最初は不安もありましたが、先輩方や仲間と一緒に踊り歩くうちに、気がつけば自然と笑顔になり、阿波踊りの熱気と一体感に心から魅了されました。あのとき「また来年も出たい」と強く思ったことを、今でもはっきり覚えています。まさかその翌年、自分が「連長」として連を率いる立場になるとは想像もしていませんでした。それも医学部たけのこ連の長い歴史の中で、女性として初めての連長を務めることになったと聞いたときは、大きな責任とともに、光栄な気持ちで胸がいっぱいになりました。とはいえ、引き受けた当初は正直不安でいっぱいでした。本当に自分に務まるのか、最後までやりきれるのかと悩む日もありました。しかし今振り返れば、挑戦して本当に良かったと思います。こんな機会は人生でそうあるものではなく、阿波踊りを通じて多くの経験を得ると同時に、たけの

こ連を通してたくさんの素敵なお会いにも恵まれました。連長を務めたこの一年は、私にとってかけがえのない財産になりました。

実際に連長として活動してみると、個人の技量や熱意だけでは到底連を動かすことはできません。衣装の準備や練習の調整、当日の運営に至るまで、共に奔走してくれた幹部の仲間たちの存在がなければ、今年の成功はなかったと断言できます。忙しい学業の合間を縫って支えてくれた友人たちには、心から感謝の気持ちでいっぱいです。今年の本番では、例年にも増して多くの参加者が集い、最終日の15日にはおよそ60名が連を組み、徳島の街を舞台に踊り抜きました。揃いの掛け声とともに列が進み、観客の方々から温かい拍手や声援をいただいた瞬間、緊張や疲れは吹き飛び、胸の奥からこみ上げる喜びに包まれました。徳島が誇る阿波踊りの魅力を少しでも伝えることができたのなら、これ以上の幸せはありません。踊りの最中、ふと横を見れば、笑顔で汗を流す仲間の姿がありました。個々の踊り手が懸命に手を振り、足を運ぶその姿こそが、阿波踊りの魂であり、連を支える力なのだと改めて感じました。

阿波踊りを通して、私はただ踊りを楽しむだけでなく、仲間と協力し合いながら一つのものを作り上げることの大切さを学びました。先人たちが築き上げてきた伝統を受け継ぎながら、新しい風を吹き込んでいくこともまた、私たちの役目であると強く思います。今年の経験と学びを胸に、これからもこの伝統を大切にし、後輩たちにしっかりとつながりたいです。



学生だより

崖っぷちだった藏本祭

蔵本祭副実行委員長
富江龍太郎(医学科4年)

10月25日・26日の二日間にわたり開催された歳本祭が、無事に終了しました。今年度は延べ約1,250人の方にご来場いただき、学生、教職員、地域の皆さまが一体となって盛り上がる、にぎやかで温かい学園祭となりました。ご来場いただいた皆さん、そして開催にご協力くださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

今年の実行委員は約50名で、例年よりも少人数ながら、できるだけ多くの人に楽しんでもらえるよう工夫を重ねて準備を進めてきました。模擬店や展示企画、ステージ発表など、それぞれの担当ごとに話し合いと調整を繰り返す日々でした。準備が思うように進まず不安になることもありましたが、仲間と励まし合いながら一歩ずつ形にしていく過程そのものが、とても貴重な経験になりました。

副実行委員長という役職をもつことであらためて仲間の力の大きさを実感しました。全体の方針を決める際には、さまざまな意見がぶつかることもありました。最終的には皆が「より良い蔵本祭をつく

りたい」という思いで一致しており、その気持ちが準備を支えていたように思います。当日、来場者の方々の笑顔や、学生のみんなが楽しそうに活動する姿を見たとき、これまでの努力が報われたと心から感じました。

今回の蔵本祭を通して感じたのは、「一人ではできないことも、仲間となら実現できる」ということです。それぞれが得意分野を活かし、支え合いながら進めていく中で、協力の大切さを実感しました。また、トラブルが起きた際に冷静に対応する判断力や、状況を見て優先順位を考える力など、今後の学生生活にもつながる学びを得ることができました。

この蔵本祭が多くの方々の支えによって成り立っていることを、あらためて強く感じています。ご理解とご協力をくださった先生方や職員の皆さま、地域の皆さまに心より感謝申し上げます。そして何より、最後まで諦めずに走り抜けた実行委員の仲間たちに、この場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。皆でつくり上げた今年の蔵本祭は、私にとって一生の思い出です。

今後の蔵本祭が、学生と地域をつなぎ、笑顔と活気にあふれる場としてさらに発展していくことを願っています。



青藍会の動き

教授就任挨拶



東京女子医科大学腫瘍内科教授
近 藤 俊 輔 (こんどう しゅんすけ)

略歴

平成12年3月 徳島大学医学部医学科卒業
平成12年5月 医師免許取得
平成15年6月 国立がんセンター中央病院 内科レジデント
平成20年4月 国立がんセンター中央病院 第一領域外来部 医員
平成22年3月 東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻終了(医学博士)
平成22年4月 国立がん研究センター中央病院 先端医療科・肝胆膵内科
令和2年4月 国立がん研究センター中央病院 通院治療センター長
令和6年7月 東京女子医科大学 化学療法・緩和ケア科 教授
令和7年5月 東京女子医科大学 腫瘍内科 教授
(現在に至る)

就任のご挨拶

東京女子医科大学腫瘍内科
教授 近 藤 俊 輔 (医学部46期)

このたび、東京女子医科大学腫瘍内科の教授を拝命いたしました近藤俊輔と申します。母校・徳島大学青藍会の皆様に、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

ご承知の通り、東京女子医科大学は、幾つかの困難に直面し、いま改めて信頼の回復と新たな歩みを求めております。私自身、これまで臨床と研究の現場で培ってきた経験を活かし、東京女子医科大学を、一步一歩着実に前進させてまいりたいと考えております。

また、日本全体が少子高齢化と人口減少という大きな変化に直面しております。東京においても近い将来にはその影響が避けられないといわれていますが、東京女子医科大学は都心にある大学病院として、多様な症例に恵まれ、全国から多くの研修医や研究者を迎えてきた豊かな歴史があります。これを基に、次世代の腫瘍内科医を育て、最新の研究成果を生かした医療を患者さんや社会に提供することができると考えております。

青藍会の皆様には、これからも温かいご指導とご支援をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。また、東京にお越しの折には、ぜひお気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。



四国大学生活科学部
健康栄養学科臨床薬理学教授
石澤 有紀 (いしざわ ゆき)

略歴

平成18年3月 徳島大学大学院医学研究科博士課程 MD-PhD コース修了
平成20年3月 徳島大学医学部医学科卒業
平成21年4月 徳島大学病院 / 徳島市民病院 医員（初期研修医）
平成23年4月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部薬理学分野特任助教
平成25年4月 同助教
平成25年4月～平成26年3月
米国ロチェスター大学 Aab Cardiovascular Research Institute, Research Fellow
平成29年4月 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬理学分野講師
平成30年9月 徳島大学 AWA サポートセンター 准教授
令和3年1月 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬理学分野 准教授
令和5年4月 医療法人倚山会田岡病院総合診療科医師
令和7年4月 四国大学生活科学部健康栄養学科臨床薬理学 教授
(現在に至る)

教授就任のご挨拶

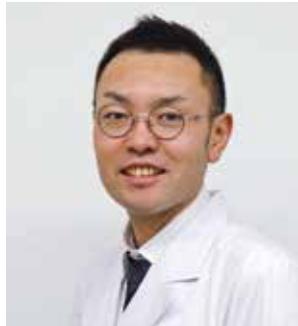
四国大学生活科学部健康栄養学科臨床薬理学
教授 石澤 有紀 (医学部54期)

2025年4月1日より四国大学生活科学部健康栄養学科の教授を拝命いたしました、医学部54期生の石澤有紀と申します。青藍会の諸先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は2003年に徳島大学医学部 MD-PhD コースに進学し、初期研修修了後は徳島大学にて基礎医学に従事してまいりました。さらに2023年からは田岡病院総合診療科にて臨床経験を積む機会を賜りました。ここに至るまで、私の Physician-Scientist としての歩みは、常に青藍会の先生方からの温かいご指導と格別のご支援に支えられておりました。この場をお借りしまして、心より厚く御礼申し上げます。

現在、四国大学では臨床薬理学の研究室を主宰しております。長年携わってまいりました循環薬理学に加え、近年、より安全な薬物治療の確立を目指し、抗がん剤や抗菌薬の副作用研究、また性差医療の分野に研究の幅を広げております。今後は、徳島大学および青藍会の先生方とより一層密に連携させていただきながら、教育・研究活動に精励いたす所存です。

最後になりましたが、この度改めまして MD-PhD コース同窓会の会長を務めさせていただくこととなりました。微力ではございますが、後進の先生方のさらなるご発展に貢献できますよう、誠心誠意尽力してまいります。青藍会の先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願ひ申し上げます。



高知大学医療学系（医学部）
内分泌代謝・腎臓内科学教授
岸 誠 司（きし せいじ）

略歴

平成6年3月 学校法人村崎学園徳島文理高等学校卒業
平成12年3月 徳島大学医学部医学科卒業（第46期）
平成12年6月 徳島大学医学部附属病院医員
平成12年9月 市立舞鶴市民病院内科
平成14年9月 兵庫県立尼崎病院腎臓内科（専攻医、副医長）
平成19年6月 徳島大学病院腎臓内科医員
平成23年1月 徳島大学病院腎臓内科（検査部）助教
平成24年9月 ハーバード大学・ブリガムアンドウメンズ病院 博士研究員
平成27年9月 徳島大学病院腎臓内科（検査部）助教
平成30年4月 徳島大学病院腎臓内科副科長
平成30年12月 川崎医科大学総合臨床医学准教授
令和4年1月 川崎医科大学腎臓・高血圧内科学特任准教授
令和7年9月 高知大学医療学系（医学部）内分泌代謝・腎臓内科学教授
(現在に至る)

教授就任のご挨拶

高知大学医療学系（医学部）内分泌代謝・腎臓内科学
教授 岸 誠 司（医学部46期）

令和7年9月1日付で、高知大学医療学系（医学部）内分泌代謝・腎臓内科学教授を拝命いたしました、医学部46期の岸誠司と申します。青藍会の先生方に謹んでご報告申し上げます。

私は徳島に生まれ育ち、平成12年に徳島大学を卒業後、土井俊夫先生が着任された腎臓内科学に一期生として入局し、市立舞鶴市民病院および兵庫県立尼崎病院にて腎臓内科医としての研鑽を積みました。学位取得後はハーバード大学に留学し、Joe Bonventre 博士の下で最先端の腎臓病基礎研究に従事いたしました。土井教授退官後は川崎医科大学に招聘いただき、腎臓学会理事長も務められた柏原直樹教授（現川崎医科大学高齢者医療センター病院長）のご指導の下、診療・教育・研究に従事いたしました。

この度、大変光栄なご縁をいただき、寺田典生先生の後任として、重責を担うこととなり、身の引き締まる思いでおります。内分泌代謝・腎臓内科学講座は、昭和53年創設の高知医科大学第二内科学講座を源流とし、今日まで大きな発展を遂げてこられました。青藍会を通じて結ばれるご縁を誇りとし、今後は高知の地で地域医療と医学の発展に尽力してまいります所存です。

今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

病院長就任挨拶

ご挨拶

高知赤十字病院院長

溝　　浏　　樹 (医学部34期)



令和7年4月1日から谷田信行前院長の後任として高知赤十字病院院長を拝命いたしました溝渕樹です。青藍会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、昭和63年に徳島大学医学部を卒業し、旧第一内科に入局いたしました。その後徳島県内の関連病院を回り、平成9年10月に高知赤十字病院に内科医として就任いたしました。その後高知県赤十字血液センター勤務を経て、令和2年4月から高知赤十字病院副院長就任、令和7年4月から院長を拝命いたしました。

当院は救命救急センターを併設し、広域的な災害拠点病院、地域医療支援病院、紹介受診重点医療機関などの指定を受けています。令和元年に、地域医療を救急医療、災害医療で支えるべく、南海トラフ地震でも被害の少ない場所に新築移転を行いました。「愛され、親しまれ、信頼される病院づくりを目指します」を理念に職員一丸となって業務に取り組んでいます。今後、人口減少、患者・職員減少などが予想されており、病院の機能維持や変更など課題は山積みです。徳島県からは離れていますが、青藍会の皆様におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

徳島県立海部病院病院長

影 治 照 喜 (医学部34期)



2025年4月1日より浦岡秀行前院長の後任として徳島県立海部病院の病院長を拝命しました影治昭喜です。責藍会の皆様方に謹んでご挨拶申し上げます。



私は1988年に徳島大学医学部を卒業後、徳島大学脳神経外科教室に入局して主に徳島大学病院に勤務し、2015年に当院に異動してまいりました。海部病院は昭和38年の開院以来60年以上にわたり、「地域に寄り添い、愛される病院になる」とする病院理念のもと、県南地域の拠点病院として、急性期医療や救急医療、在宅診療等、地域の皆様に寄り添う医療の提供に取り組んでいます。しかし、当院の歩んできた道のりは苦難の連続でした。2004年以降、医師数は著しく減少し、2010年には3分の1の6名となり、病院存亡の危機に直面しました。このとき、医師の確保・育成のために、総合診療科、産婦人科、脳神経外科の寄附講座が開設されました。当院では「医師の負担軽減と医療の質向上」のために、全国に先駆けて医療Dxとして2013年に「遠隔医療」を導入しました。2025年冬から通院困難な患者さんを支援するため、オンライン診療機能を備えた「医療MaaS車両」で、地域で診療や健康相談などを行う「海部・那賀ヘルスケアモビリティープロジェクト」として、全国に例がない県と海部郡・那賀郡の共同運用で展開する予定です。今後も、「地域に寄り添い愛される病院」、「医療従事者にも選ばれる病院」となるよう、職員一同努力してまいります。そして、当院の強みである、救急医療、災害医療、在宅医療を更に推進し、我々が全国に先駆けて導入してきた「遠隔医療」を全国のフロントランナーとして更に発展させていくつもりです。

青藍会の皆様におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

青藍会事務局事務長就任退任挨拶

事務長就任のご挨拶

青藍会事務長 米 崎 正 則

小西竹生前事務長の後任として、令和7年8月1日付けで青藍会事務長を拝命いたしました米崎正則でございます。青藍会会員の皆様には青藍会会報の紙面をお借りしまして、謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、昭和58年4月に徳島大学工学部に事務職員として採用されてから令和2年3月までの37年間を徳島大学と鳴門教育大学で勤務し、定年退職後の令和2年4月からは徳島大学障がい者就労支援センターに再雇用職員として5年間勤務しました。勤務年数は事務職員37年間と再雇用職員5年間の合計42年間となります。このうちの半分以上の25年間は徳島大学医学部を中心とした蔵本地区で勤務させていただきました。蔵本地区の主な職歴としては、医学部総務係長（2年間）、歯学部事務室長（3年間）、歯学部総務課長（1年間）、医学部総務課長（2年間）、蔵本事務部長（2年間）、障がい者就労支援センター長（4年間）でございます。

この度、ご縁がありまして青藍会事務局でのお話をいただきました。長年お世話になり、また一番愛着を持っています徳島大学医学部に少しでも貢献できること、本当に嬉しく光栄のことであると思っています。青藍会の発展・充実のため精一杯頑張りたいと考えておりますので、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

事務長退任のご挨拶

青藍会前事務長 小 西 竹 生

本年7月31日をもちまして、事務長職を退任しました小西です。2021年1月から4年7ヶ月の間、青藍会の皆さま方には大変お世話になりました。荒瀬会長のご指導の下、持続可能な同窓会組織の構築に取り組んでまいりましたが、当初はコロナ禍の真っ只中でもあり、十分な活動もままなりませんでした。特に荒瀬会長の青藍会に対する熱い思いを会員の皆さま方にお伝えすることも難しく、将来の青藍会を担う学生の皆さん方に如何に関心を持ってもらうかも困難でした。何とか会報の100号記念号（令和4年12月）発刊にあたり、学生さんを含めた座談会を令和4年6月に実施し、学生さんとの対話の重要性を痛感しました。その後、コロナが落ち着いた時点で、医学部長、医学科長にご出席いただき、1年生から6年生の総代・副総代の皆さんにご参加いただき、会長、副会長と一緒に懇談会を実施しました。学生さん方と意見交換することで、少しは青藍会への関心を持っていただけたと感じております。令和5年度からは、学生の皆さん方を正会員としてお迎えし、今では総会にも何名か参加してくれています。今後は、若い会員の皆さんに青藍会活動に関心を持っていただき、青藍会全体の活動が益々活発になるのではと思っております。先輩の先生方と若い会員の皆さんのが上手く調和し、会則にある「会員相互の親睦を厚くし、学術の向上を図り、もって母校の発展に尽くす」ことを目的とした組織としていつまでも継続され、発展することを祈念しております。

最後に、後任として医学部の総務課長や医歯薬学事務部の事務部長を経験されている米崎正則氏に事務長をお願いしました。今後とも新事務長を支えていただきますようお願いいたします。長い間本当にありがとうございました。

投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、寄稿者の氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル〇〇〇〇〇〇〇〇 山田太郎(医学部〇期)
- 文字数は1,400字以内、写真(カラー)は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
(例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生)

○ 原稿及び写真の送付について (青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp)

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEGファイル等でお送りください。
原稿(Word等)に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがあります。容量を小さくして
1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかつた場合は、届いて
いないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います (次号107号の締め切り日は令和8年3月27日(金)です)

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。
締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願ひ申し上げます。

編 集 後 記

青藍会会報第106号をお読みいただき、誠にありがとうございます。

本年度より、広報委員会委員長を拝命し、会報編集に携わらせていただくこととなりました。初めての編集作業を通じて、徳島大学医学部にゆかりのある多くの方々の温かい想いや、医療・教育・研究の現場でご尽力される姿に触れることができ、大変光栄に感じております。

原稿の一つひとつからは、母校への誇り、仲間への思いやり、そして地域医療への深い使命感が伝わり、「青藍会」というつながりの確かさを改めて実感いたしました。

今後も、青藍会会員の皆さまを結ぶ「架け橋」として、より多くの方に親しみをもつてお読みいただけ、充実した誌面づくりを目指してまいります。

最後になりましたが、執筆ならびにご協力を賜りました皆さんに心より感謝申し上げます。引き続き、青藍会会報へのご支援とご協力をよろしくお願ひいたします。

沼 田 周 助 (医学部46期)

編 集 広報委員 沼田 周助 (46期) 大塚 秀樹 (40期) 工藤美千代 (33期) 田中 克哉 (36期)

原田 和代 (33期) 板東 浩 (27期) 森岡 久尚 (45期)

学生広報委員 安倍隆之介 (医学科3年) 加藤 碧 (医学科3年)

非 売 品

青藍会会報第106号

令和7年12月3日印刷

令和7年12月10日発行

発 行 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会

〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15

電話 (088) 633-7109 (内線2601)

FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)

E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp

URL <https://www.seirankai-tokushima.jp/>

振替 01680-4-8671

ゆうちょ銀行 一六九店 (169)

当座 0008671 青藍会

発行者 青藍会会長 大串文隆

印刷所 グランド印刷株式会社

徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448

